

井上円了における近代西洋哲学研究の原点

「明治十六年秋 稿録」とその展開

清水 乞 *shimizu tadashi*

1. はじめに

筆者は本誌 Vol. 15において、井上円了（以下円了と称す）の修学期（第一期・慶応二年、石黒忠愍の私塾に入門してから明治十年、出郷するまでの在郷修学時代。第二期・明治十年、東本願寺教師教校を経て上京、東京大学予備門入学から明治十八年、東京大学哲学科卒業までの学生時代）における即自的思想形成をその行動面から考察した（「修学期における井上円了の座標（報告）」2006年9月20日）。しかし、この報告は行動軸のみで肝腎の思想軸が完全に欠落していた。この期における円了の行動と思想を窺い知ることが出来る直接的文献は明治5年から明治16年の間に作られた三冊の漢詩集（「襲常詩集」、「詩冊」、「屈嫂詩集」）であるが、筆者は漢詩を読解することができないので本稿ではこれに言及しない（幸いにして新田幸治氏を中心とする研究会の成果の原稿コピーを、三浦節夫氏を介して、頂いたので漢詩集については他の機会を期したい）。

「明治十六年秋 稿録」（以下「稿録」）は99.9%が英文である。明治16年前後3年間における円了の言論活動は、佛教、キリスト教、儒教、哲学と多岐にわたっている（拙稿「前掲論文」参照）。こうした中で、円了は実に丹念に多くの英書を読み、それを抜粋し、僅かではあるが、感想を書き入れて、この「稿録」を手元に置いたのであるが、彼は卒業論文に儒教（「読荀子」）を課題としている。筆者はこの点に興味を持ったので『井上円了選集』第25巻所収の「読荀子」を読んだ。その中に、「排孟論」（明治17年1月25日、2月25日、「東洋学芸雑誌」28号・29号）に言及

されているので、この論文のコピーを読んだところ、同じ儒教を主題としている両論文は論調が全く異なっており、「読荀子」は『荀子』からの引用によって論を進めているのに対して、「排孟論」は全面的に近代西洋哲学者の諸説から孟子説を論評している。その哲学者は21人、論文の段落の主題に応じて、各哲学者の説が要約され紹介されている。

円了の大学時代の研究勉学を直接伝える文献資料は、回顧談を除けば、「稿録」が唯一のものである。幸にして喜多川豊宇「井上円了英文稿録解」（斎藤繁雄編著『井上円了と西洋思想』東洋大学 1988所収）により復刻され、原本は東洋大学図書館に所蔵されている（E09281 IE 4）。そこで喜多川豊宇氏の労作を手掛りに、「排孟論」所出の近代西洋哲学者の諸説について、円了の要約文と「稿録」の英文抜粋および円了の感想文（以下「書き込み」という）を比較検討した。この結果、「稿録」が大学時代における円了の西洋哲学説に関する知識の源泉でると同時に、広く哲学・思想の歴史観を確立する原点あったと確信するに至った。そこで「排孟論」に加えて、その展開として『倫理通論』（明治20年2月初版 選集第11巻所収）、『哲学要領』（明治20年4月初版 選集第1巻所収）および『心理摘要』（明治20年9月初版 選集19巻所収）および「妖怪玄談」（明治20年5月 選集19巻所収）を取り上げた。本稿は「稿録」の展開を検証することが主たる目的であるが、「稿録」は即自的教育環境の中で円了が問題意識をもって課題（ここでは哲学、倫理、心理）に取り組んだ対自的思想形成の出発点であるという意味付けが動機となっている。なお本稿の性質上、煩瑣であることを承知の上、重複を顧みず「稿録」からたびたび転記した。この重複を了承されたい。

謝意：本稿執筆に際して、三浦節夫氏より「稿録」原本と「排孟論」のコピーの提供を受けた。厚くお礼申し上げる。

なお、一々明記しなかったが、使用した英文テキスト、井上哲次郎の著書はI.T.の検索により引き出した版を利用した。

1-1. 大学時代の著作活動

本論に入るに先立って、円了が東京大学入学してから卒業する間の論文中心の言論活動を通観して置く。大別して「開導新聞」（東本願寺機関誌）に寄稿した仏教関係の時事論文、「明教新誌」（大内青巒主宰の仏教新聞）に寄稿した排耶論（『真理金針』）、「東洋学芸雑誌」（哲学会機関誌）と「学芸志林」（東京大学機関誌）に寄稿した学術論文、「令知会雑誌」に寄稿した『哲学要領』の4種である。心理学関係の論文は見られないが、卒業後間もなく円了は心理学担当者として教育活動を開始しているのであるからその準備の大部分は完成していたと考えてよい。

学術論文は「読日本外史」を除いて、すべて中国思想を主題としているが円了の問題意識としては、中国思想の課題を西洋思想の中に見出し、新たに解釈・批判することによって、その両者を超えた独自の哲学を創出することであった。中国哲学と西洋思想とを概括・対比して、円了は次のように云っている。シナ哲学は大別して二種、老荘の道教と孔孟の儒教である。老荘は西洋の任他主義、中には自晦主義という。申韓の法家は干渉主義。楊子は自利主義で、ギリシャの哲学エピクロス派の主義に似る。墨子の兼愛はベンサム等の功利説に近い。孟子の性善説はリード等の説と同じ。荀子の性悪を論じ積習注錯を以って心性の発達を証明したのはロックの学派と異ならない。孔子の人倫を本とするのはソクラテスの主義に似る。莊子、列子の精紳不滅説はピュタゴラス等の論に似る。老子の道の本体論はスピノザの本質論、シェリングの絶対論、スペンサーの不可知的論に似る。関尹子が道の幽妙を論じている説はヘーゲルの理想論に似ている。その他、諸子百家の説はみな西洋にその類を見る。シナ諸家の論は憶想仮定より立論しているものが多く、論理の貫徹しているものはない（『哲学要領 前編』第三段 シナ哲学 第12節 比考；選集1、pp. 97-98、下線は筆者）。

また仏教に就いても同様に「俱舎の極微は化学のいわゆる元素なり。

故にその教理、あるいは西洋哲学中の唯物論に類すというも可なり。つぎに大乘唯識の森羅の諸法、唯識所変と立つるは西洋哲学中の唯心論に似たり。その第八識すなわち阿羅耶識はカント氏の自覚心、またはフィヒテ氏の絶対主観に類す。つぎに般若の諸法皆空を談ずるは西洋哲学中、物心二者を空ずる虚無学派に似たり。つぎに天台の真如縁起は、西洋哲学中の論理学派すなわち理想学派に似たり。その宗立つるところの万法是真如、真如は万法というはヘーゲル氏の現象は無象、無象は現象と論ずるところに同じ。起信論の一心より二門の分るるゆえんは、シェリング氏の絶対より相対の分るる論に等し。そのいわゆる真如はスピノザ氏の本質、シェリング氏の絶対、ヘーゲル氏の理想に類するなり」(『同前書』第19節 釈迦教)と云う。

このように主語を中国・仏教思想、述語を西洋思想とする叙述形式は、西洋思想を既知のものとして具体的に述べる形式であり、この場合、読者は西洋の知識を具えていなければならないが、西洋思想はそこまで一般知識層の間で常識とはなっていなかったのではなかろうか。しかしこれが円了の属していた東京大学という知的環境の大勢であり、円了の学術的論文は、この種の環境に属する高い水準の知識人を予想して著されたものであり、少なくとも、これを前提として解釈・評価されなければならない。

明治14年（この年9月東京大学入学）（；の前は雑誌の号数、後は刊行の月日『井上円了関係文献年表』東洋大学 1987による）

「主客問答」（『開導新聞』148～167；10.11～25）選集25

明治15年

「耶蘇防禦論」（『開導新聞』188～190, 192；1.11～1.19）

「堯舜は孔教の偶像なるゆえんを論ず」（『東洋学芸雑誌』9；6.25）選

集25

「僧侶教育法」(「開導新聞」285~288; 8. 3~9) 選集25

「宗乱因由」(「仏教演説集」15; 8.21)

「宗教編」(「開導新聞」315~352; 10. 5~12.25) 選集25

明治16年

「黄石公は鬼物にあらず又隠君子にあらざるを論ず」(「東洋学芸雑誌」20; 5.25)

「読日本外史」(「東洋学芸雑誌」25; 10.25)「稿録」末尾 参照

明治17年

「排孟論」(「東洋学芸雑誌」28, 29; 1.25, 2.25)

「哲学要領」(「令知会雑誌」1, 6, 7, 8, 9; 4.29~12.21) 選集1

「加藤先生の一大疑問に答えんとす」(「東洋学芸雑誌」33, 明治17. 6.25)

「読荀子」(『学芸志林』15-85, 明治17. 8) 選集25

「耶蘇教の畏るべき所以を論ず」(「明教新誌」1753; 10.24)

「耶蘇教を排するは理論にあるか」(「明教新誌」1756, 1769; 10.30, 11.26)

「余か疑団何の日か解けん：耶蘇教を排するは理論にあるか」(「明教新誌」1759, 1769, 1763, 1765, 1777, 1779, 1781; 11. 6~18, 12.12~20)

「孟子論法を知らず」(「東洋学芸雑誌」38, 39; 11.25, 12.25)

明治18年(この年7月10日東京大学卒業)

「哲学要領」(「令知会雑誌」10, 11, 12, 14, 19, 20; 1.21, 2.21, 3.21, 5.21, 10.21, 11.21, 「教学論集」18~20, 22~24; 6. 5, 7. 5, 8. 5, 10. 5, 11. 5, 12. 5)

「余か疑団何の日か解けん：耶蘇教を排するは理論にあるか」(「明教新

誌] 1814; 3. 4)

「耶蘇教を排するは理論にあるか」(「明教新誌」1817, 1820, 1836, 1837, 1839, 1843, 1845, 1883, 1884; 3.12~7.30)『破邪真論』(明教社 明治18)、『真理金針 初編』明治19.12.29刊行(選集3)

「易を論ず」(「学芸志林」17-96~97; 8. 5、8. -)

「僧門改良の今日に急務なる所以を論ず」(「令知会雑誌」18; 9.21)

「動物必ず思想ありや否やの間 [に対する答]」(「同上」)

「動物必ず思想ありや否やの間 [に対する答]」(「同上」19; 10.21)

「偶然を論ず」(「耶蘇教を排するは理論にあるか」の抜抄)「東洋学芸雑誌」(50; 11.25)

『破邪新論』(明教社 11. -)

「耶蘇教の難目」(教学論集)(24; 12. 5)

明治18年以後の活動

東京大学官費研究生:「官報」(7.29)、「令知会雑誌18」(9.21)、印度哲学研究

印度哲学取調掛:「本山報告4」(10.25)

大谷教校高等科で心理学を開講:「令知会雑誌20」(11.21)

明治19年

通信講学会心理学講師:「教育時論26」(1. 5)

[通信講学会は明治18年12月、湯本武比古など「教育時論」の関係者によって教育学、心理学、倫理学、論理学、経済学、生物学、数理などの学科を学校教員や修学の志ある者に教授するために設立された通信教育機関(通史編1 p.54)]

1-2. 「稿録」と学術思潮

円了の在学中に哲学・思想界に衝撃的な事件があった。それは円了の恩人・加藤弘之の天賦人權思想から進化論への転向である。具体的には明治14年に、『真政大意』（明治3年）と『国体新論』（明治8年）の旧著を絶版して、翌年『人權新説』を著したことを指す。『真政大意』では「天のもっとも愛したもうものゆえ、人に限りては、万福を与えたもう天意とみえて……不羈自立を欲する情が第一に熾ん」（巻上）であると述べ、『国体新論』では諸自由権は「もと天賦にして、……、この権はあえて他より奪うべきはずのものにあらず」（第6章）と、共に天賦人權の立場を鮮明にしていた。しかし、加藤弘之は『国体新論』の随処で「国学者流」を批判している故、国学者からの強い反対があり、明治12年の講演「天賦人權説ナキノ説并善悪ノ別天然ニアラザルノ説」で天賦人權説を否定を鮮明にしていたが、「物理の学科に係れるかの進化主義をもって、天賦人權主義」を進化の「実理をもって妄想を駁撃するため」（第6条）、『人權新説』を発表するにいたる。この加藤弘之の「転向」は円了に少なからず影響を与えたのではなからうか。以下、「稿録」に見える西洋近代哲学者の著書に副って、この点を検証したい。

東京大学附属図書館・特別展示会『東大黎明期の学生たち—民約論と進化論のはざま—』（平成17年11月）によると、加藤弘之は明治10年後半以降、ドイツから進化論の独訳、およびドイツで進展した社会進化論や国権思想の書物を取り寄せ、ノートを取りながら学習に励んでいる（読書ノート『疑堂備志』）。その成果は『人權新説』に見られる通りである。この第1章・第1条の冒頭において加藤弘之は、西洋において「物理に係れる学科」の進歩により「進化の実理を発見して、はじめて従来の妄想主義を脱却する」ことができたが、「心理に係れる諸学すなわち哲学・政学・法学等」の学者達は「妄想主義の範囲に彷徨して」これから脱却できないでいた。しかし最近喜ばしいことに、「心理に係れる諸

科の学士中、往々物理の学科の裨補を得て、もっぱら実理の研究に従事せんと欲する卓見高識の徒」が現れた。彼等は「みな多少物理の主義、ことに多くはかのダルウィン氏が発見せる進化主義の裨補を得て、大いに心理において発見せるところあるをもって、おのおの書を著してこれを論究せり」として、以下の諸書を挙げている。

第1条

Draper : History of the Conflict between Religion and Science

History of the Intellectual Development of Europe

「今日にありて心理に係れる哲学の理を論ぜんと欲せば、かならずまず物理に係れる生理学 [身体生活するゆえんの理を研究する学科] を修むるにあらざれば、その論ずるところいたずらに妄想空理にとどまりて一も取るにたるものあらず」。

Buckle : History of Civilization of England

Bain Mental and Moral Science

Mind and Body

Lecky History of Rationalism in Europe

History of European Morals

Bagehot Physics and Politics (物理及び政理)

Spencer Descriptive Sociology

Data of Ethics

Haeckel Natural History of Creation (進化史)

「わが進化主義たるやけだし将来人世の大開明を促すところの最大源泉たるものなるべし、近世この主義のはじめて開けしより生物学 [すなわち動物学・植物学の二科をいう] すみやかに一大変するにいたりしが、ついでまた人類学 [すなわち吾人人類の体質・心性の発達するゆえんを研究する学科] の大進歩を來たすべきは論をまたず。しかのみならず哲学もまたこれによりて従來の妄想主義を脱してもっぱら人性の実理を研

究するものとなり、したがいてついに社会道德の大成をいたすにいたるべし」。

その他

第12条

Lubbock Origin of Civilization

ラボック氏〔英人〕の説に、古来野蛮人民が天然十分なる自由権利を有せりと認めしはもつとも大なる謬見なり。野蛮人民は厳酷なる風俗・習慣のために压制を被ることもつとも大なるものなりといえり。

Tylor Primitive Culture

Darwin The Descent of Man

第20条

ヘケル氏の著すところの『進化史』に、「およそ優劣競争のことは、宇宙万物はもちろん、吾人人類世界においてもけつして絶ゆることあらずして、つねに吾人の利益・幸福を進むるものなり」といい、バジオー氏もその著すところの『物理および政理』と題せる書に、古代戦争のはなはだ盛んなりしは、実に吾人社会の開化を進むるの最要具なりしゆえんを論ぜり〔バジオー氏著 Physics and Politics〕

第21条

Mill On Liberty

その著書『自由の理』に説くところの全体の旨趣をもって推考するときは、同じく天賦人權を信ぜしことあえて疑うべからず

Spencer Social Statik

その著書『社会権衡論』において論説するところをみれば、同じく天賦人權を実存するものと認めしこと、これまた疑いを容るべからざるなり。

加藤弘之が引用した文献を円了はどの程度知っていたであろうか。

山口 静一「フェノロサと井上円了」(『センター年報』Vol.1)より推測すると、円了は以下の文献に関する情報を得ていた可能性がある。

資料 [1の2] 東京大学文学部哲学科学生(井上円了)の履修学科より抜粋

明治14年度第1学年

史学 (井上哲次郎) 『仏国史』、ギゾー『欧州開化史』、およびレポート

明治15年度第2学年

史学 (外山正一) 社会学、英国憲法史

心理学 (外山正一) ベイン、カーペンター、スペンサー

明治16年度第3学年

哲学 (外山正一) 心理学

[1の3] 哲学科使用の教科書・参考書

外山正一

第2学年 心理学

ベイン『心理学』、カーペンター『精神整理学』、マーズレー『精神生理及病理学』、アバクロンビー『智力学』、ヘッケル『創造史』、スペンサー『哲学原理総論』

第4学年 心理学

ダーヴィン『生物原始論』、『人類原始論』、『情緒発顕論』、ルイス『哲学史』、タイラー『太古人類史』、ラボック『開化起源論』、レッキー『欧土明理説』、スペンサー『万物開進論』、『心理学』、フィスク『万有哲学』、他ミル、スペンサーの新論文

外山正一は周知の通り、シカゴ大学に留学し、明治5年勉学の志をたて官を辞し、ミシガン州アンナバーのハイスクールに入り、1年半後、ミシガン大学において哲学と化学を修め、同地で進化論についてのモー

スの講演を聞いて感銘を受けたことがあった。

明治9年化学科を卒業して帰国し、明治10年、英語と心理学を担当。のちには社会学と哲学を講義したが、とくに進化論に力を注ぎ、学生たちからは「スペンサー輪読の番人」と呼ばれたほどである。余談であるが、外山正一は七五調のリズムに乗ってダーウィンやスペンサーの著作を解説している（例えば、「社会学の原理に題す」。加藤弘之の「疑堂備忘」は「稿録」に継承されているし、外山正一の「社会学の原理に題す」は後年の哲学史を詠った円了の新体詩（選集2、p.241～p.248）や「哲学和讃」（前同、p.433～p.439）を髣髴させる。こうして見ると、円了が外山正一から得たものは大きかったであろう。「稿録」を見よう。

1. 【 】中は「稿録」の喜多川論文と手稿の頁。2. 《 》中の文章、語句は筆者の注記。3. 「 」の語句は円了による「小見出し」。以下総て同じ。なお記述のカタカナはひらがなに改めた。

(A) 抜粋のみ、書き込みなし

BOOK 1 Spencer's First Principle of Philosophy Part 1. The Unknowable Chapter 1. Religion and Science, Chapter IV. The Indestructibility of Matter, Chapter V. The Continuity of Motion, Chapter VI. The Persistence of Force, Chapter VII. The Persistence of Relation among Forces (抜粋なし) 【pp. 275～275 ; Ms. 5b～9b】

(B) 著者と書名のみ、抜粋なし、僅かの書き込みあり

Ronanes Intelligence

Peschel's The Race of Man

人種の動物より進化せんを論ず

Lubbock, Origin of Civilization

野蛮より開明の進歩したること

Haeckel's Evolution of Man

Huxley's 論文

Darwin's Expression of Emotion

【p. 222 ; Ms. 123a~b】

(C) 抜粋と書き込みあり

Lecture of Evolution of Philosophy

学界進化論

Lubbock's Origin of Civilization and Primitive Condition of Man

He concludes thus (p. 323 at the end)

此意若し社会愈々退歩して来りしものならば、余輩将来に望を属すべきなし、然れども世は益々進化するものなれば、是より益々余輩の幸福を増進すべき知るべき也、

余案ずるに開明愈々進めば益々貧富の懸隔多かるべし、拉氏の説と大いに反するあり。【pp. 216-217 ; Ms. 136b-137b】

p. 256 at the end of Chapter VI, Lubbock says :

理学は宗教の真理を駁するにあらず、其正理に反する点を破するのみなりの意を明す 【p. 215 ; Ms. 138a】

No doubt her influence has always been exercised in opposition ……

耶蘇教の真理となりて、世間に行わるゝに至りしは、理学進達の力に由る 【p. 215 ; Ms. 138b】

Draper's Conflict between Religion and Science

In the preface, it is said :

是即ち宗教と理学との争論起る所以なり 【p. 215 ; Ms. 138b】

Draper says, at the end of the book :

理学の進むに従って宗教其権威を滅殺すべき所以を論ずるなり
【p. 214 ; Ms. 139a】

Origin of Science (Chapter 1)

Religious condition of the Greeks in the fourth century before Christ. —

……

Haeckel says : Where faith commences, science ends. 【p. 214 ; Ms. 139a-b】

Buckle says :

愚人は宗教の外容をとりその真味を知らず

宗教の害をなすは教にあらずして人にあり 【p. 214 ; Ms. 139b~140a】

斯氏最大幸福説を駁して曰く

(Social Statics) 人の幸福と考ふる所各、異にして、其体とする所又異なる、是れ只人と時と共に異なるに由るのみならず、一人にても其とき異なれば其考ふる所又異ならざるべからず 【p. 214 ; Ms. 140b】

Happiness signified a gratified state of all faculties. ……

In Spencer's Biography

Definition of Life 【p. 213 ; Ms. 141a】

Haeckel's creation.

About the Descent of Man — 【p. 213 ; Ms. 142a】

(D) 書名と著者のみ [長大な文献リストの後]

The Races of Man (Peschel) Mis. 10

The Evolution of Man (Haeckel) 2V. Mis. 11

Origin of Species

Origin of Civilization (Lubbock) Mis. 9

The Descent of Man (Darwin) Mis. 12

Expression of the Emotion of Man (Darwin) Mis. 13

Animal Intelligence (Romanes) Mis. 29

Animal Locomotion (Pettigrew) Mis. 30

【p. 203 ; Ms. 203b】

ここに挙げた文献は円了が纏まりとして列挙したものに限り、単独に挙げられた文献には触れなかったので加藤弘之、外山正一が挙げた文献のすべてではないが、円了が進化論を意識していたことは、これによって読み取ることができるであろう。ここでは英文抜粋を省略したので判り難いが、円了の書き込みの内容は加藤弘之の問題意識とは違って、必ずしも進化論そのものではなく、宗教と理学の関係（例えばCグループ）への関心か強く表れている。しかし「稿録」の(a)~(z)、(以)~(利)の書き込みに見られる通り、「物理と心理」、「唯物と唯心」の関係は、円了にとって重要な課題であったことを示唆しており、これは『哲学要領・後編』に反映している。

この二人よりも、円了が直接間接に多大の影響を受けたのは井上哲次郎である。詳細な検証は省略するが、井上哲次郎の『西洋哲学講義』6巻（明治16年~明治18年、井上留学の為に巻5・6は有賀長雄）、『倫理新説』（明治16年）、抄訳『倍因氏 心理新説』（明治15年）は特に重要である。『倫理新説』は明治14年の講義を『学芸志林』に発表、これに基づいた著書であるが、緒言で「此篇は化醇主義に本づき、化醇の紀律に遵ひ、完全の域に達するを以て道德の基址とす」といっている。そうして本論の後半は「化醇論」に当て、近世の進化論の代表としてダーウイン、スペンセルを挙げ、諸分野の進化論的学者としてヘッケル、ラマール（生物学）、バイン、モーヅレー（心理学）、レッケー、ドレープル（歴史）、カルペントル、フルハウ（医学）、ロボツク、タイレル（社会学）、メイン、バゼホット（法理学）、トムソン、チンテール（物理学）、ゼヴィン、クリッフィルド（数理学）、ライエル、ホクスレー（地質学）

等を挙げ、彼等「化醇論者」がキリスト教会の弾圧と闘ったことをのべている (pp. 34-35)。

井上哲次郎の抄訳・編著『倍因氏 心理新説』の倍因氏とは上掲の心理学のペイン (Alexander Bain) である。この抄訳の1875年出版のみで書名は明記されていないが、加藤弘之が言及していた Bain : Mental and Moral Science, Part First. Psychology and History of Philosophy, London 1872である。円了は『通信教授 心理学』、『心理摘要』において、この抄訳を参考にしたようである。

『西洋哲学講義』は円了が通読したと思われるが、6巻中の5・6巻は有賀長雄が担当して完成したもので、4巻の巻末に、近世哲学の講義は帰国後に譲る旨が述べられている。この「緒言」に「……余是を以て頃ろ門生の為にシュヴェグレル、リウウィス、ユーベルウエグ諸氏の哲学史に拠って西洋哲学の概略を講述し、以て東洋哲学を興さん事を企図すれども、遠地の人并に他の事業をなす人は与り聞くを得ず、故に既に講述せし所の趣意を略記し、以て世に公にす、看宮若し余が微裏の存する所を諒察せば幸甚、

明治16年6月17日 著者 識し、

また「第2に、哲学は前に論じた如く、諸学を統合する学にして、諸学の資給する材料を集め、以て概括する所あらんとす、是れ実に他の諸学の為す能はざる所なり、他の諸学中若し之を為す者あらば、是れ亦哲学と称すべきなり、故に哲学は他の諸学の為す能はざる所を為すののなり、且つ夫れ哲学は心理、倫理、政理、法理等の諸学の基礎なり、故に哲学上の疑問を解釈し得るにあらざれば、是等の諸学は確乎たる基礎を有すといふべからず、(巻1・6～7丁)」とあることは、特に円了の哲学に対する根本思想に係る発言として注目したい。第1に、両井上の西洋哲学を研究する目的は東洋哲学振興にあったことである。若き円了の自覚は井上哲次郎の目的意識と無縁ではなからう。ことの成否は別と

して、円了は仏教学に、哲次郎は儒学に立って西洋思想を超えた普遍性を哲学の中に探っていたのである。第2は円了に帰せられる「諸学の基礎は哲学にあり」の標句は、既に井上哲次郎によって表明されていた。円了はこれを教育の場で実践したのである。その他、円了の文献資料の取り扱い、学術用語の使用等細部において、井上哲次郎は常に学問上の道標であった。この点についての検証は「稿録」にとっても重要な課題であるが、他稿に譲らざるを得ない。

1-3. 英文抜粋の姿勢

「稿録」に見られる項目と科学者・哲学者の名前・著書数は膨大であり、茅野氏は、後に見る通り、哲学一般・心理学・論理学・倫理学・教育・その他の項目で220種以上の書名、各種の哲学史から80名以上の哲学者」を指摘し、A・シュヴェーグラー『哲学史提要』（J・H・スターリング：Handbook of the History of Philosophy, 1863）からの抜粋は「九割以上が正確な抜粋」であることを確認しておられる。

本稿の目的は「排孟論」、『哲学要領』、『倫理通論』等と「稿録」との関係を検証し、円了の研究・思想の原点を探ることである。それだけに、円了の「稿録」における英文抜粋の姿勢は看過することができない。前述の通り円了は学界の大勢に副って、加藤弘之や小山正一、あるいはフェノロサ（円了がフェノロサについて語っていない理由は解らない）、井上哲次郎に導かれつつ、すでに多くの知識を得ていたことであろう。それを自ら確認する作業が「稿録」であったともいえる。

「稿録」に見られる主な英語文献は次の通りである。（「稿録」の表記による）

[巻頭部分]

1. Spencer's First Principle of Philosophy/Part 1. The Unknowable/
Chapter 1, Chapter IV, Chapter V, Chapter VI, Chapter VII 【pp. 275-273】

2. The Chinese Classics By James Legge 【pp. 271-270】
3. Bain's Sense and Intellectual about the Classification of Mind 【p. 270】
4. Alden's Text Book of Ethics 【p. 270】
5. Moral Science by Alexander 【p. 270】
6. The Philosophy of the Moral Feelings/by Abercrombie 【p. 269】
7. Elements of Moral Philosophy/by Winslow 【pp. 269-268】
8. Bain's Moral Science 【pp. 268-257】
9. Definition of History/by Voltaire 【p. 257】
10. Habit and Intelligence/by Murphy 習慣智力論 【pp. 257-255】
11. Handbook of the History of Philosophy/by Schwegler 【pp. 255-227】
12. Voltaire's Dictionary of Philosophy (under destiny) 【pp. 277-226】
13. Uberweg Logic (pp. 226-225 ; 以下 p. 216まで a-z、以一利の項目については後出)
14. Lubbock's Origin of Civilization and Primitive Condition of Man 【pp. 216-217 ; 以下 p. 213までは前出】

[末尾部]

15. Mill's Three Essays of Religions 【pp. 210-211】
16. Tyndall's Address (p. 56)/(His thought of religion) 【p. 209】
17. Chamber's Scripture Geography 【p. 200】
18. An Epitome of the History of Philosophy 【pp. 200-198】

なお、【pp. 202-201, pp. 198-191】の中国思想史に関する抜粋と【pp. 191-188】の潜在意識、table-turning, Explanation of table turning の抜粋については未確認である。

1. ~10. の文献は「Conscience, -see Ethic G. 15, V, IV」【p. 270、記号は不明】の表題のもとに「Conscience」の記述を採り上げているものであるが、ここでは 文献 4、6、7 を例として円了の英文抜粋の実態を検証したい（文献 8 は英文抜粋が最も多く好例であり、円了が最も精読

したものであるが、煩雑になるので採り上げなかった)。加えて、円了が(a)-(z)の項目を立て、「小見出し」的書き込みをしている項目の内、(r)～(s)項中の「Bain's Mind and Body」により断片的な抜粋・書き込みの例として見ることにする。

4. A Text-Book of Ethics for Union Schools and Bible, N.Y. 1867

21. [Does not conscience make known to us our duty?] Conscience makes known to us some of our duties. 22. What is conscience? Conscience is the mind's power of perceiving the difference between right and wrong. 23. Is conscience something separate from the mind? It is simply a power or faculty of the mind. (p. 9 : CHAPTER I. RIGHT AND WRONG-CONSCIENCE-MORAL OBLIGATION.)

1. What is meant by the phrase, "our moral nature"? Our capacity to perceive duty, and to act freely in view of it. (p. 12 : CHAPTER II. THE MORAL NATURE OF MAN-MAN A FREE AGENT CLAIMS OF DUTY-NEED OF REVELATION) 「稿録」【p. 270】

[稿録] は21節を23節の後に置き、文頭の疑問文は省略し、It is conscience that makes us our duty. と変えている。22節の Conscience は It に変え、23節文頭の疑問文を省略し、最後の疑問文では the phrase を除き、主文に It is を加えて叙述文としている。このように抜粋に際しても主体的姿勢が見られる。書名によって明らかな通り、本書はキリスト教の倫理を説くもので、Bible-Class Text Book Ethics と呼ばれている。従ってキリスト教徒を対象として著作したものである。本文は92頁、20章から成る小著である。円了のキリスト教理解の手掛りになる一文献である。

6. The Philosophy of the Moral Feelings, preface 1835. 250 pages.

(2.) The determination may arise from a sense of duty, or an impression of moral rectitude, apart from every consideration of a personal nature. This is the Moral Principle, or Conscience ; (p. 53)

This analysis of the principles which constitute the moral feelings indicates the farther division of our inquiry in the following manner :

- I. The Desires, the Affections, and Self-love.
- II. The Will.
- III. The Moral Principle, or Conscience.
- IV. The moral relation of man towards the Deity. (pp. 54-55 Analysis of the Moral Feeling)

Without arguing respecting the propriety of speaking of a separate power or principle, we simply contend for the fact, that there* is a mental exercise, by which we feel certain actions to be right and certain others wrong. It is an element or a movement of our moral nature which admits of no analysis, and no explanation; and is referable to not other principle than a simple recognition of the fact, which forces itself upon the conviction of every man who looks into the processes of his own mind. (pp. 148-150)

to act under the influence of conscience is to perform actions, simply because we feel them to be right, and to abstain from others, simply because we feel them to be wrong, without regard to any other impression, or to the consequence of the actions either to ourselves or others. (p. 152)

Conscience is the regulating power, which acting upon the desires and affections, as reason does upon a series of facts, preserves among them harmony and order. (p. 153) [p. 269]

本書は上記の Introduction に述べられている I, II, III, IV を表題と

する 4 部構成であり、pp. 54-55の通りである。「稿録」は Preliminary observation からの抜粋であり、後段の抜粋は PART III. OF THE MORAL PRINCIPLE, OR CONSCIENCE. の一部分である。円了は Conscience の記述に絞って読み進めたことが解る。

抜粋の後に、「The Moral Relation of Man towards the Deity, Part IV, p. 161.(V. 38)」(末尾部分の文献リスト Ethics の最初)と記載しているが抜粋はない。円了は主題を Conscience に限定していた為、この章からの抜粋を控えたのであろう。余談であるが、筆者が参考にしたテキストは 1846年の米国版であって、学校などの教科書として編纂されている Jacob Abbot なる人物による補足説明と試験用の質問が付けられている点で、4. A Text-Book of Ethics for Union Schools and Bible, N.Y. 1867と同類の文献である。

7. Elements of moral philosophy : analytical, synthetical, and practical, 1856, 485 pages.

DEFINITION OF CONSCIENCE. Conscience, as mentioned in the Bible and generally understood, is not a single primitive faculty. It includes both the power of perception, and a susceptibility to a peculiar feeling. (p. 107)

FIRST FUNCTION OF CONSCIENCE. Conscience makes us feel that we ought to do what we believe to be right. (p. 110)

SECOND FUNCTION OF CONSCIENCE. The second function of conscience is, to afford us a delightful feeling of self-approval when we have done what we believe to be right. (p. 111)

THIRD FUNCTION OF CONSCIENCE. The third function of conscience is, to inflict upon us a peculiar painful feeling, when we have done what we believe to be wrong. (p. 112)

本書は483頁の大著で、5部構成である。「稿録」の抜粋はPart II Rational Motive Power からであるが、主題のみを抜粋して内容については省略している。なお円了は下線部分を「Its」に変え、また定義 (DEFINITION) をI、機能 (FACULTY) をIIに分類して抜粋しているが、大文字の表題は省略している。本書の抜粋は単なるメモであろう。本書は、著者が “This volume is (中略) to assist the student to understand them, and to benefit the general reader. (中略) His object has been to (中略) present the entire subject, with its just proportions, in a clearly practical light, and as related to Christianity, in a way to bring it within the apprehension of the attentive popular reader, as well as the student.” (p. 13. Introduction.) という通り前掲2書と同類の文献である。

Mind and Body. Theories of their Relation, N.Y. Appleton & Co. 1875

Bain's Mind and Body [p. 221, Ms. 124b-125a]

心身の関係を論ぜり

第一に感応は言説又は外貌に顕はる

In the first place, it has been noted in all ages and countries, that the Feelings possess a natural language or Expression. (text-chap. 2 Conexion of Mind and Body, p. 6)

第二に身体上の変化は心理上に其影響を生じ心性上の変化は身体上に見□□□□飢餓、労働、睡眠、疾病等の心性に影響するが如し。憂患、恐懼等健康上に影響する如し

As to the influence of bodily changes on Mental states, we have such facts as the dependence of our feelings and moods upon hunger, repletion, the state of the stomach, fatigue and rest, pure and impure air, cold and warmth, stimulants and drugs, bodily injuries, disease, sleep, advancing years

(text-p. 9)

(s) 脳と心の関係

1. a blow of the head which suspends conscious

[Under the first topic, the commonest observation is the effect of] a blow on the head, which suspends for the time consciousness and thought ;
(text-p. 12)

2. increase of the product of nervous waste, mental exertion

[Thus, after great mental exertion or excitement, there is an] increase of the products of nervous waste. [Thus, after great mental exertion or excitement, there is an] increase of the products of nervous waste.
(text-p. 13)

[Among the chief causes of insanity must be reckoned excessive drafts on the mind as, for example, long and severe] mental exertion, (text-pp. 13-14)

3. quality & quantity of food supplied to brain

- (a) no organ is active without blood
- (b) deficiency in circulation's effect
- (c) demand by brain corresponds with its function in degree
- (d) in sleep, diminution of its supply

血量の少なきときは心用を弱くす/之に反して vice versa to abcd

【Ms. 125a】

[A very instructive class of facts may be adduced, connecting mental action with] the quantity and quality of the blood supplied to the brain. No organ is active without blood (a). The demand made by the brain corresponds with the extent and energy of its functions (d). Deficiency in the circulation (b) [is accompanied with feeble manifestations of mind.] In sleep, there is a diminution of the supply (d) of arterial blood to the brain. [General

depletion lowers all the functions generally, mind included.] On the other hand (c), (text-pp. 14-15)

本書は明治20年に谷本富（1867～1946）ほか譯註：『心身相關之理』（大倉書店出版）として翻訳されたのであるから、円了は直接テキストを利用している。

2. 「稿録」について

2-1. 先行研究（解説はしないで、直接引用による）

1. 喜多川豊宇「井上円了英文稿録解」（前掲）

序言

略記

稿録執筆時代の円了

「この稿録は明治16年（円了26才）から明治20年（円了30才）の間に綴られたものと確定できる」【p. 285】。

(2) 英文稿録に実証される円了に与えた諸洋学思想

「稿録の巻頭から始められた部分には約86項目、末尾から始められた部分には約10項目の哲学・宗教・歴史・倫理学・社会学・実験心理学等々の広汎な分野にまたがった円了の直筆が網羅されている」【p. 284】。

便覧【p. 282】

1. 本解説はすべて原文に忠実に行なってある。従って、明らかにミスプリントと思われるものも、敢えて、そのままにしてある。
2. 原文中どうしても判読、解説できないものについては、……
3. 英文に対する、円了の日本語の書き込み場所は、ほぼ、原文の場所に対応しているが、やむを得ず、多少場所が移っているものもある。
4. 巻末「外史評論」は、「稿録」の巻末に書かれていた評論である。
5. 本文中の訂正、削除、斜線傍線は原文のまま再現した。

Ⅱ. 茅野良男「井上円了の哲学史研究について」(『satya』17号 1995冬季号 東洋大学井上円了記念学術センター pp. 34～36)

「しかし、英文の孟子と支那哲学史の抜粋、日本外史に関する評論抄を除けば、円了の日本語での要約や所感以外は、ことごとく英語文献の抜粋である。研究ノートとして、哲学一般・心理学・論理学・倫理学・教育・その他の項目で二二〇種以上の書名、各種の哲学史から八〇名以上の哲学者が挙げられ、実際の抜粋は哲学史・哲学・道徳哲学・心理学の著作がほとんどである」(p. 35上～中)。哲学史の著者と書名 (p. 35中)。A・シュヴェーグラーの『哲学史綱要 概観への手引き』についての解説 (p. 35下)。この英語訳は『哲学史摘要』(B.E. スミス：A History of Philosophy in Epitome, 1890；1880年、原書第九版改訂に従った改訂版、初訳は1856年、J.H. シーリ訳) (p. 36上)。つぎの英訳は『哲学史提要』(J・H・スターリング：Handbook of the History of Philosophy, 1863) (p. 36上)。『提要』本文の頁と抜粋した「稿録」英文の頁との対応 (p. 36中～下)。「円了はフェノロサの哲学史を明治十五年度前期十二月から翌年二月まで聴講したと思われる。「稿録」がシュヴェーグラーの古代哲学史に集中するのは、フェノロサが近代哲学史を講じたからか。翌年から『令知会雑誌』に連載の「哲学要領」のためであったか。日本最初の哲学小史たる後者の基礎となったことは确实である」(p. 36下)。

参考：円了旧蔵の関係文献の内、抜粋された文献

Spencer, Herbert : First principles. New York, D. Appleton and co., 1886
Ueberweg, Fridrich : History of the philosophy from Thales to the present time. Translated from the 4th German ed. by Noah Porter. New York, Charles Scribner's, 1887

Chamber's encyclopaedia ; a dictionary of universal knowledge for the people, 1868

Kant, Immanuel : Critique of pure reason, Translated by F. Max Muller, London, Macmillan, 1881

Lewes, George Henry : The Biographical history of philosophy ; from its origin of in Greece down to the present day, Library ed. New York, D. Appleton and Co., 1888

Bain Alexander : Moral science; a compendium of ethics. New York. D. Appleton, 1873

Caird, John. : An introduction to the philosophy of religion. New York, Macmillan, 1881

Carpenter, William B. : Principles of mental physiology, with their applications to the training and discipline of the mind and the study of its morbid conditions. New York, D, Appleton, 1887

Haeckel, Ernest. : The history of creation : or ; The development of the earth and its inhabitation by the action of natural causes. Translated by rev. E. Ray Lankester. 3rd ed. London, Kegan Paul, 1883

2-2. 「稿録」の形式と内容

洋紙のノート。縦-21 cm、横-32 cm 半折。罫線：縦-20 cm、横-0.85 cm（丁の左右両端の横は2行分）、行数：21行×2。紙数：巻頭部分は表紙を含めて142丁、末尾部分は最終丁（僅か虫食いあり）を除いて71丁。英文の為、すべて横書きで、上の半折は空白が多い。[本稿では上半折を Ms. a 下半折を Ms. b と表記する]

「稿録」の内容は喜多川氏の労作によって十分知ることが出来ると思う。しかし喜多川氏の論文には、後記と思われる墨書による書込み（「」中の語句）、円丁が×印・斜線等により削除した英文抜書きがあるが、これらが区別なく再現されている。また円丁が設定した項目について喜多川氏と意見を異にする点があるので、煩雑ではあるが喜多川論文

の頁と手元にある手稿のコピー（手稿 Ms. の頁は入手時の順による）を対応して、主要な項目を追いながら、以下に紹介することにする。[《 》中の語句は筆者による]

2-2-1. A. 巻頭部分

見返し：漢詩【Ms. 2a】，Science & Religion/Calderwood/V. 368，三十六
老陽 三十二 少陰 二十八 少陽 二十四 老陰【Ms. 2b】

白紙 《円了の印》【Ms. 3a】

英語文献の著者・書名・記号【Ms. 4b】《喜多川論文になし》

Spencer : First Principle of Philosophy, part 1. chap. I. IV. V. VI. VII.
【pp. 275-274 : Ms. 5b-9b】《喜多川論文では本文の始まり》

不可知、真理など－抜粋

Schwegler : History of philosophy, Philosopher (Ancient, Modern)
【pp. 273-271 : Ms. 13b-15b】

西洋古代・近代哲学者の名前と生存年代－抜粋

Legge : Chinese Classics, 【pp. 271-270 : Ms. 16b-18b】

中国古典－抜粋、書き込み

Bain : Sense and Intellect about the Classification of Mind, 【p. 270 :
Ms. 19a-b】

良心論－抜粋

(Bain) Alexander : Moral Science, 【p. 270 : Ms. 19b】

Abercrombie : The Philosophy of the Moral Feelings, 【p. 269 : Ms. 20a21a】

良心論－抜粋

John Abercrombie (1780-1844) スコットランドの医者、哲学者。

Winslow : Elements of Moral Philosophy, 【pp. 269-268 : Ms. 21b-22a】

良心論－抜粋

Bain : Moral Science, 【pp. 268-257 : Ms. 22a-47a】 スコットランド学派

古代近代哲学者の良心論－抜粋、書き込み

Voltaire : Definition of History, 【p. 257 : Ms. 47b-48b】

歴史と伝説－抜粋、書き込み

Murphy : Habit and Intelligence, 【pp. 257-255 : Ms. 48b-51b】

抜粋、書き込み－習慣、観念連合

A Letter from Spence to Mill, 【p. 255 : Ms. 51b】

功利－抜粋

Schwegler : Handbook of the History of Philosophy, 【pp. 255-227 : Ms. 52b-112a】

西洋古代哲学史の抜粋と書き込み

Voltaire : Dictionary of Philosophy (destiny), 天命論 【pp. 227-226 : Ms. 113b-115a】

運命－抜粋

Chamber : Encyclopedia, 【p. 226 : Ms. 115b】

項目のみ

Haeckel : History of Creation, 【p. 226 : Ms. 115b】

意志について－抜粋

この段は欧米の哲学・自然科学者の専門と書名が明確でない場合があるので、●[] の中に簡単に付記した。a～z の記号により分類された項目の「」内は小見出しの語句。

Ueberweg, Logic 【pp. 226-225 : Ms. 116b-117a】

《「Ueberweg」喜多川論文になし》

論理についての抜粋

●[Friedrich Ueberweg 1826-1871, ドイツの哲学史家。

System der Logik (1857 ; 5th ed., 1882 ; Eng. trans. of 3rd ed. by T. M.

Lindsay, 1871)

(a) Definition

《(a)、喜多川論文になし》

(b) Trichotomy — 【p. 225 : Ms. 117b】

《Ms は以下 b~z の記号・小見出しは「墨書」》

Sir William Hamilton : 【p. 225 : Ms. 117b-118a】

心理学 - 抜粹、書き込み

《書名不明》

●[Sir William Hamilton, 9th Baronet, 1788-1856, スコットランドの形而上哲学者。

Discussions on Philosophy and Literature, Education and University Reform (London, 1852), containing his articles published in the Edinburgh Review ; Notes and Dissertations, published with his edition of T. Reid's Works (2 vols., Edinburgh, 1846-63) ; Lectures on Metaphysics and Logic (ed. H. L. Mansel and J. Veitch, 4 vols., 1859-60), of which an abridgment of the metaphysical portion (vols. i. and ii.) was edited by F. Bowen (Boston, 1870).]

心理学 He takes the science of mind as philosophy proper.

Philosophy necessarily tends the first cause.

《ハミルトンの項は「除く」(墨書)とある》

(c) Consciousness and knowledge involve each other. (I know=I am conscious) (Ms. 118a)

(d) The Physical basis of mind/

「活力生む」

by Lewes (George Henry Lewes) Lewe 【p. 225 : Ms. 118a-b】

生命力についての抜粹

●[George Henry Lewes (April 18, 1817-November 28, 1878) 英国の哲学・文学評論家。

The Physical Basis of Mind (1877)]

《d の項はすべて斜線 (墨線) を引く》

(e) Leckey's Rationalism [p. 224 : Ms. 118b]

「社会、智力、□達/生力其元」

進歩についての抜粋、書き込み

William Edward Hartpole Lecky, OM (1838-1903)

● [William Edward Hartpole Lecky, OM (26 March 1838-22 October 1903)

アイルランドの歴史家・出版者。

History of the Rise and Influence of the Spirit of Rationalism in Europe,
1865 (1879 rev. Vols. 2)]

(f) Bray's Anthropology Bray [p. 224 : Ms. 119a-b]

宇宙の生成、星雲説 - 抜粋、書き込み

「地球進化、□□は帰元の例になる」

● [Charles Bray (1811~1884) 英国の哲学者・著作家。

A Manual of Anthropology or Science of Man, based upon Modern Research
(1871)]

(g) heat, light, electricity …… (Ms. 119b)

「生力、□元、造化の□□入る」

「心理と物理と同一の理法に入るべし」(ペン字の小見出し)

Huxley : [p. 224 : Ms. 119b-120a]

宇宙と生命についての抜粋

(h) Bray の説にては…… [p. 224 : Ms. 120a]

「非心非物」

(i) Kant's Metaphysics of Ethics [p.2 23 : Ms. 120b] 「初に入れるべし」

理論と実践 - 抜粋

「仏英西洋哲学者の系譜・名前 - 省略」(Ms. 120b-121a)

(j) Kant (speculation) Reid (common-sense) (Ms.121a)

「初一」

(k) Hamilton's Logic [p. 223 : Ms. 121a-b]

論理、真理の基準 - 抜粋

● [Lectures on Metaphysics and Logic, 4 vols. edited by HL Mansel, Oxford, and John Veitch (Metaphysics; Logic) ; and Additional Notes to Reid's Works, from Sir W. Hamilton's Manuscripts., under the editorship of HL Mansel, D.D. (1862).]

Stirling's Secret of Hegel [p. 222 : Ms. 122a] 「物心一体の処に入るべし」

ヘーゲルの宇宙説についての抜粋

● [James Hutchison Stirling (1820-1909) : 英国の観念論哲学者。

The Secret of Hegel : Being the Hegelian System in Origin, Principle, Form, and Matter, 1865.]

(m) Maudsley's Physiology of Mind [p. 222 : Ms. 122a-b]

「心理組成の処」

生命体についての抜粋と書き込み

● [Henry Maudsley (1835-1918), 英国の心理学者。

The Physiology of Mind. ; Enlarged and revised 3rd editions, 1876]

(n) 是を以て mind as the most dependent of all the natural forces と結び
心理は物理を以て証せり (Ms. 122b) 「心理は物理なり」

(o) Stewart's Conservation of energy Stewart [p. 222 : Ms. 123a]

分子エネルギーについての抜粋

● [Dugald Stewart (1753~1828) : スコットランドの哲学者。

The Collected Works edited by William Hamilton, with a brief sketch of Stewart's life by John Veitch (11 vols., 1854-1860) Dissertation, on the History of Metaphysical and Ethical Science, 1835.]

force 1. mechanical or molar/2. molecular (1. heat/2. light/3. chemical/4. electricity [力の種類])

《この総てに×印(墨線)を付す》(Ms. 123a)

心力は大いに物力と異なる所あれ共……

「心理・物理」

Romanes Intelligence Romanes 【p. 222 : Ms. 123a】

書名のみ

●[George John Romanes 1848-1898 : カナダ生まれの英国博物学・心理学者。neo-darwinism なる語の考案者。

Animal Intelligence (1882)]

● Peschel's The Races of Man 【p. 222 : Ms. 123a】

書名のみ - 書き込み

[Oscar Peschel (1826-1875) : ドイツの民族学・地理学者。

The Races of Man and their Geographical Distribution, trans. London, 1876.]

Lubbock, Origin of Civilization 【p. 222 : Ms. 123a】

「人種進化」

書名のみ - 書き込み

●[John Lubbock 1834~1913 : 英国の銀行家・政治家・博物学者。

The origin of civilization and the primitive condition of man. (1870, 4. Aufl. 1881 ; deutsch, Jena 1875)

Haeckel's Evolution of Man 【p. 222 : Ms. 123b】

書名のみ - 書き込み

●[Ernst Haeckel 1834~1919 : ドイツの生物学者。ドイツ唯物論的自然哲学。自然主義的進化論的一元論、物心一元論(生物的一元論、エネルギー)

ギー恒存則)。

Evolution of Man: A Popular Exposition of the Principal Points of Human Ontogeny and Phylogeny By Ernst, 1883]

(D) Huxley's 論文【p. 222 : Ms. 123b】

論文 - 不明

● [Thomas Henry Huxley (1825-1895) : 英国の生物学者。

Evolution and Ethics and Other Essays, 1894]

Darwin's Expression of Emotion【p. 222】

「物心一体論」

書名のみ

● [The expression of the emotions in man and animals. London, John Murray, 1872 8vo, pp vi 374]

Hickok's Logic of Reason【p. 222 : Ms. 123b】

書名のみ - 書き込み

● [Laurens Perseus Hickok (1798-1888), 米国の哲学者・神学者

Logic of Reason, 1874]

(q) Ribot's Psychology【p. 222 : Ms. 123b-124a】

書名のみ - 書き込み

● [Theodul Armond Ribot 1837~1916 (後再出)

Psychologie de l'attention, 1888 ; La psychologie des sentiments, 1896]

従来の哲学は……【p. 221 : Ms. 123b~124a】

「心理・物理」

(r) Drapper's Intellectual development【p. 221 : Ms. 124b】

「智力の進化」

書名のみ－書き込み

● [John William Draper 1811～1882 : 米国の科学者・哲学者・歴史家。

A History of the Intellectual Development of Europe, 1864.

Professor of Chemistry and Physiology in the University of New York.]

Bain's Mind & Body Bain 【p. 221 : Ms. 124b】 《前出》

書き込み－書き込み

● [Alexander Bain (1818-1903) スコットランドの哲学者・教育者。

Mind and body, The theories of their relation, 1874.]

(s) 脳と心の関係 《前出》

(t) History of Philosophy by Ueberweg 【pp. 221-220 : Ms. 125a】

「哲学と理学の別」

哲学－抜粋、書き込み

● [Fredrich Uberweg (1826-1871) ドイツの哲學家。

History of Philosophy, From Thales to the Present time., London, Hodder & Stoughton. 1872-1874. 2v.]

Wolf : 【p. 220 : Ms. 125b】

名前－哲学と科学の書き込み

Kant : 【p. 220 : Ms. 125b】

名前－哲学についての書き込み

Herbert : 【p. 220 : Ms. 125b】

名前－抜粋

Hegel : 【p. 220 : Ms. 125b】

名前－抜粋

(u) Modern (Ms. 126a)

Empirical

Dogmatic

(v) George Henry Lewes, History of Philosophy 【p. 220 : Ms. 126b】

科学と哲学についての抜粋

●[George Henry Lewes (April 18, 1817–November 28, 1878) 英国の哲学者・文学評論家。

The Biographical History of philosophy, from its origin in Greece down to the present day, 1845–1846]

(w) Ribot's Heredity 【p. 220 : Ms. 127a】

「智力は性力・心理」

本能について－抜粋、書き込み

●[Theodule Armond Ribot (1839–1903), フランスの心理学者。

His thesis for his doctor's degree, republished in 1882, Heredity]

Buckle : 【p. 220 : Ms. 127a】

名前－遺伝についての書き込み

(x) Galton's Hereditary genius 【p. 220 : Ms. 127b】

「遺伝《喜多川論文になし》」

天才についての書き込み

●[Sir Francis Galton F.R.S. (1822–1911), Charles Darwin の従弟、人類学者・優生学者・熱帯探検家・地理学者・気象学者・原始遺伝学者・精神鑑定家・統計学者・発明家。

Heredity Genius, 1892]

Henry Maudsley's Body and Mind 【p. 219 : Ms. 127b】

書名のみ

●[Henry Maudsley (1835 ; 1918) 英国の先駆的心理学者。(前出)

Body and Mind: An Inquiry into their Connection and Mutual Influence.
Macmillan 1870]

[不明] 心身関係 [不明]/Logic of chance by Ven.

《この行は×印を付す》

(y) Flint, History of Philosophy 【p. 219 : Ms. 128a–b】

仏独の哲学者の名前 – 抜粋

● [Robert Flint (1838-1910) スコットランドの神学者・哲学者。

Philosophy of History in France and Germany 1874]

French [Ms. 128a]/German [Ms. 128b]

(z) Sidgwick's Fallacies [p. 219 : Ms. 129a] 「循環に入るべし」《喜多川論文に z なし》

定義について – 長い書き込み

(以) laws of thought [p. 218 : Ms. 129b] 「唯物唯心に入る」《喜多川論文では z》

思考法則の抜粋

● [Alfred Sidgwick. (1850-1943) 英国の実用主義哲学者

Fallacies : a view of logic from the practical side, N.Y. 1892]

《Ms は以下、「以～利」の記号・小見出しは墨書。喜多川論文に記号の記入なし》

(呂) Everett : Science of thought, [p. 218 : Ms. 129b] 「思想進化」《喜多川論文になし》

長い書き込み：氏曰く思想は [不明]/生活は理を以て[不明]それ自体の力を以て発生す。思想は木石の如き品物にあらざれば、自体に具する所の力を以て發育することを得と云い、又自ら其力を外に現ずるは理想自体の性質なり。/氏曰く外物はすべて其形を思想の上に現ずるにあらざれば我人之を知る能わず。/又曰く外界は [不明]

《「生活は……発生す」を線で消す》

● [Charles Carroll Everett (June 19, 1829-October 16, 1900), 米国の神学・哲学者。

The Science of Thought, Boston, 1869 ; revised 1891]

(波) Kirkman : Philosophy without Assumption, [p. 218 : Ms. 130a]

書名のみ、書き込み I am

● [Thomas Penyngton Kirkman 1806~1895 英国の数学者・哲学者。

Philosophy without assumption. (William Wallace 1844~1897, Review :
Academy vol. 9, 1876)]

Bowen : Modern philosophy, [p. 218 : Ms. 130a]

書名のみ、書き込み - 理学と哲学

● [Francis Bowen (1811-1890) 米国の哲学的作家・教育者。

Modern Philosophy from Descartes to Schopenhauer and Hartmann,
1877]

Ferrier : System of Philosophy, [p. 218 : Ms. 130b]

「唯心」

書名のみ、書き込み - 哲学

● [James Frederick Ferrier (1808-1864) 英国の哲学史家、スコットラン
ド学派

The Institutes of Metaphysic, 1854.]

(仁) Murphy : Habit and Intelligence, [p. 218 : 131a] 「習慣論」 《喜多川
論文になし》

書名のみ、書き込み - 習慣、連想

● [Murphy, Joseph John (1827-1894) ベルファスト生まれ。リンネン紡
績工場主。ベルファスト文学会、ベルファスト博物・哲学会の会長。

Habit and Intelligence, in Their Connexion with the Laws of Matter and
Force : A Series of Scientific Essays , London : Macmillan, 1869.]

[A thoroughly Darwinist treatment, hence an incunabula of Darwinist
psychology, published before Darwin himself had applied evolutionary

theory to human mental development in *The Descent of Man and The Expression of the Emotions.*]

Caird : *Philosophy of Kant*, [p. 218 : Ms. 131a]

書名のみ、書き込み、哲学についての抜粋

● [Edward Caird (1835-1908) スコットランドの哲学者。

A Critical Account of the Philosophy of Kant, focusing on the Critique of Pure Reason and the Prolegomena to any Future Metaphysics, 1877]

(保) Jevons : *Principle of Science*, [p. 218 : Ms. 131b] 「**理学の基礎**」

《喜多川論文になし》

科学についての書き込み、抜粋

● [Jevons, William Stanley : 1835-1882 英国の経済学・論理学者。

Principles of Science : A treatise on logic and scientific method , 1874]

Hume : *Human Nature*, [p. 218 : Ms. 131b]

書名のみ

Fiske : *Outline of Cosmic Philosophy*, [pp. 218-217 : Ms. 132a]

科学－書き込み、抜粋

氏の説にては…… [p. 217] 「**理学の義解**」 《喜多川論文になし》

● [Fiske, John : 1842-1901 米国の哲学者・歴史家。

Outlines of Cosmic Philosophy, 1874]

Wright : *Philosophical Discussion*, [p. 217 : Ms. 132b]

書名のみ

● [Chauncey Wright (1830~1875), 哲学者・形而上学者・数学者・ダー

ヴェイン説信奉者。

Philosophical Discussions, N.Y., 1877]

Mansel : Metaphysics, [p. 217 : Ms. 132b]

書名のみ

● [Mansel, Henry Longviewille 1820~1871 スコットランドの哲学者、
ハミルトンの弟子。

Metaphysics 1860 ; Philosophy of the Conditioned, 1866]

[認識は直感と思惟とに分かたれ、その材料は内的及び外的の直観によ
って供せられる。空間及び時間は先天的直観形式であり、因果の原理も
先天的である。然し彼はこの因果関係を力の概念（意志活動）によって
説いた。（出 隆・岩哲辞、876頁）]

Aristotle divides Speculative Philosophy/1. Physics M（この行、斜線で消
す）/

History of Inductive science (by Whewell)/X345, V84, V92, V79 [p. 217 :
Ms. 132b]

書名のみ

[William Whewell (1794~1866) カントの認識論をイギリスに伝えた。直
感主義的倫理学者、数学・物理学者としても有名。

History of Inductive Sciences, 1837]

Ward : Dynamic Sociology, [p. 217 : Ms. 133a-b]

「生活」「本?源」

《喜多川論文では「生活の基礎」》

科学についての抜粋

● [Lester Frank Ward 1841~1913 : 米国の地理学・古生学者。コント、
スペンサーの社会学を読む。

Dynamic Sociology, or Applied social science, as based upon static sociology and the less complex science, 1883]

(辺) Dynamists ……【p. 217 : Ms. 133b】「力の論」《喜多川論文になし》
……………

The object of all science is ……

【ト】(欠) Force may be defined as molecular impact. ……【p. 217 : Ms. 133b】「物と力との関係」《喜多川論文になし》

(智) Whewell : History of Inductive Science,【p. 217 : Ms. 134a】「理学の基礎」

科学についての抜粋、書き込み

●[William Whewell (1794~1866)] (前出)

Wright : Philosophical Discussion【pp. 217-216】

書名のみ

Hamilton : Psychology,【p. 217 : Ms. 134b】

「自然理論の定限」

主体・客体についての抜粋

Wright :【pp. 217-216】

自然淘汰についての抜粋

Newtonian theory of gravity, or Harvey's theory of the circulation of the blood —【p. 216 : Ms. 134b】「天地」《喜多川論文になし》

See, Physical theory of Universe, V.79《末尾部分の文献リストの V.79は Philosophical Discussion》

(利) Sir W. Herschel : [nebula hypothesis],【p.216 : Ms.134b-135a】

「子ビュラ」《喜多川論文になし》/

名前のみ。星雲説についての抜粋

●[Sir Ferderick William Herschel (1738-1822) 英国の天文学者。]

The Natural History of Creation (Naturliche Schopfungsgeschichte)]

“Assuming a self-luminous substance …… 【p. 216 : Ms. 135a】 「地質論」

Laplace : 【p. 216 : Ms. 135a-b】

名前のみ。星雲説についての抜粋

●【Pierre Simon Laplace 1749～1829 : フランスの天文・数学者。天体発
生に関する「カント・ラプラス説」により哲学界に注目される。

L'exposition du systeme du monde, 1796.】

Wright : 【p. 216 : Ms. 135b】

「自然淘汰の定限」

星雲説、自然淘汰についての抜粋

Lecture on Evolution of Philosophy/学界進化論 【Ms. 136b】

Lubbock : Origin of Civilization and Primitive Condition of Man 【pp. 216-215
: Ms. 136b-138b】

p. 323 at the end : テキスト結論の抜粋、書き込み

p. 256 at the end of Chapter VI : 科学と宗教についての抜粋、書き込み

●Sir John Lubbock (前出)

Draper : Conflict between Religion and Science, 【pp. 215-214 : Ms. 138b-
140a】

テキスト序文と結論の抜粋、書き込み

●John William Draper (前出)

斯氏最大幸福説を駁して曰く/

Spencer : Social Statics, 【p. 214 : Ms. 140b-141a】

幸福についての抜粋

●【Herbert Spencer 1820～1903 : 「総合哲学」の特色は、物理的・心理的
社会的・倫理的諸現象にまで普く適用された進化論的方法と、一切の学問
に共通な根本的対象として不可知者 The Unknowable を認めることであ

る。A System of Synthetic Philosophy (First Principles, 1860~62. (円了-哲学原理、以下同じ)、Principles of Biology, 2vols., 1870~67 (生物論)、Principles of Psychology, 2vol 1870~72 (心理論)、Principles of Sociology, 3vols., 1876~96. (社会論)、Principles Ethics, 2vols. 1892~93 (倫理論)、Education, 1861. The Classification of the Science, 1864. Recent Discussions, 1871. The Study of Sociology. 1873. The Factors of Organic Evolution, 1887. 岩哲辞)

Social Statics : or, The Conditions essential to Happiness specified, and the First of them Developed, London 1851] 『心理摘要』 p. 18参照]

Spencer : Biography, [p. 213 : Ms. 141a]

生命に定義 : 表題のみ

Schelling : [1. definition of life] [p. 213 : Ms. 141a]

Rickerand : [2. definition of life] [p. 213]

De Blainville : [3. definition of life] [p. 213 : Ms. 141b]

G.H. Lewes : [4. definition of life] [p. 213]

Spencer : [5. definition of life] [p. 213 : Ms. 141b]

以上 5 人の名前のみ : 抜粋

Haeckel : Creation, [p. 213 : Ms. 142a]

人類の進化についての抜粋

● [Ernst Heinrich Haeckel, 1834-1919 ドイツの生物学者。

the Natural History of Creation (Naturliche Schopfungsgeschichte),

Ernst Haeckel, The History of Creation, trans-lated by E. Ray Lankester, Kegan Paul, Trench & Co., London, 1883, 3rd ed.,

進化要論/ヘッケル著 ; 山県梯三郎訳 普及舎, 明21. 1]

2-2-2. B 末尾部分

見開き (B-Ms. 1a) は空白で、【B-Ms. 1b~Ms. 2a】は著者・略書名・

記号が記入されている。英文抜書きは【B-Ms. 2b】より始まる（喜多川論文はこれを末尾部分の始まりとする、p. 212）。

Caird : Kant V184=Philosophy of Kant 【p. 213 : B-Ms. 1b】

Comte : Science V22=History of Science 【p. 213】

Cousin : History of Philosophy V66=History of Modern Philosophy 【p. 213】

Dall : Evolution ? 【p. 213】

Day : Ontological [X 266 Day Outlines of Ontological Science] 【p. 213】

Fleming : V166=Vocabulary of Philosophy [: Psychological, ethical, metaphysical, with quotations and references] (1860) [William Fleming 1791-1866] 【p. 213】

Greg : V 【p. 213】

Hume : Human Nature V190=Treaties on Human Nature 【p. 213】

Huxley : Nihilism ? 【p. 213】

Jevons : Science V63=Principle of Science 【p. 213】

Lenge : Materialism V180=Lange : History of Materialism 【p. 213】

●「Friedrich Albert Lange 1828-1875 German philosopher, pedagogue, political activist, and journalist. Neo-Kantianism」

Lewes : Biological V 71=Biological History of Philosophy 【p. 213】

Wilkinson : Materialism ? 【p. 213 : Ms.B-Ms. 1b】

Alden : V28=Elements of Intellectual Philosophy 【p. 213 : Ms.B-Ms. 2a】

以上、名前と書名、図書記号のみ

Friswell : V 160=記入なし 【p. 212】

Reid : V130=Essays on Intellectual Power of Man 【p.2 12】

Tuke : V 211 ? (Ms. 1b) [V 271 Tuke : Mind upon the Body] (Ms. 20a) 【p. 212】

以上、名前と書名、図書記号のみ

●「Daniel Hack Tuke 1827-1895 Illustrations of the Influence of the Mind

upon the Body in Health and Disease, Designed to Elucidate the Action of the Imagination, 1884.」

Mill : Three Essays of Religion, 【pp. 212-211 : B-Ms. 2b-4b】 《円了の印》
論文 Nature からの抜粋 《文末の「(Utility of Religion) は喜多川論文になし」》

John Stuart Mill (1806-1873) : Three Essays on Religion : Nature, Utility of Religion, Theism の 3 論文 (1874)

J.A. : A Note from Tokio Lecture, 【pp. 211-209 : B-Ms. 5b-11a】 《J.A. は不明》

キリスト教と自然科学・進化論についての講義

What is Science ?/What is Religion ?/Relation of these two/A host of workers/As to Globe Development/Conclusion/The doctrine of immorality of the soul.

Tyndall : Address [p. 56], 【p. 209 : B-Ms. 11b-12a】

宗教思想についての抜粋

●「John Tyndall. John Tyndall (1820-1893) アイルランドの自然哲学者」。

文献リスト 【pp. 208-203 : B-Ms. 12b-22a】

Peschel : The Races of Man, 【p. 203 : B-Ms. 23b】

●「Oscar Peschel (1826-1875) ドイツの地理学者」。

Haeckel : The Evolution of Man 【p. 203 : B-Ms. 23b】

Origin of Species 【p. 203 : B-Ms. 23b】

Lubbock : Origin of Civilization 【p. 203 : B-Ms. 23b】

Darwin : The Descent of Man 【p. 203 : B-Ms. 23b】

Romanes : Animal Intelligence 【p. 203 : B-Ms. 23b】

Pettigrew : Animal Locomotion 【p. 203 : B-Ms. 23b】

《以上、「稿録」は書名の次に著者名を（ ）に入れる。》

外史評論 【p. 188 : Ms. 24b~25b】。 《コピーの乱丁か》

Development of Chinese Philosophy, 【pp. 202-201 : B-Ms. 26a-32a】《書名は不明》

希臘哲学本源論 - 【p. 200 : B-Ms. 32b】 《喜多川論文になし》

Chamber : Scripture Geography, 【p. 200 : B-Ms. 32b-33a】

エジプト人、アラビア人、ペルシャ人についての抜粋

Gazetter of the World, 【p. 200 : B-Ms. 33a】

Chemistry of Creation : 【p. 200 : B-Ms. 33b】

化学と七曜についての書き込み、抜粋なし

An Epitome of the History of Philosophy, 【pp. 200-198 : B-Ms. 34a-38b】

インド、エジプト、ギリシャ哲学についてのテキストの抜粋

●「Henry, (Caleb Sprague), 1804-1884 米国の牧師、ニューイングランド
超越論者・道徳哲学者。

Bautain : An epitome of the history of philosophy : being the work adopted by the University of France for instruction in the colleges and high schools : translated from the French, with additions, and a continuation of the history from the time of Reid to the present day/by C.S. Henry, New York : Harper & Brothers, 1869. 哲学通史 (インド・中国を含む)」

(p. 51) 印度希臘両哲学の起源についての疑問 【p. 199 : B-Ms. 35b】

(p. 58) 印度哲学と西洋哲学の比較 【p. 199 : B-Ms. 36a】

《テキストは pp. 64-83に中国哲学が説かれるが、円了は省略している。》

(p. 89) 埃及文明の起源 【p. 199 : B-Ms. 36b】

(p. 98) 希臘学の起源 【p. 198 : B-Ms. 37b】

《以上の書き込みの場所は喜多川論文と異なる》

(p. 110) 【p. 198 : B-Ms. 38b】

中国思想史 【pp. 198-191 : B-Ms. 39a-57b】

《テキストからの抜粋、テキストは不明。手稿では改頁して、An Epitome of the History of Philosophy とは別のテキストと思われる。》

《【B-Ms. 56ab, B-Ms. 58b】 は中国歴代王朝の期間の計算に関する雑記》

潜在意識 【pp. 191-188 : B-Ms. 59b-71b】

テキストからの抜粋と書き込み

「○我人の努力の多くは自動作用より成る」 【p. 191 : B-Ms. 59b】 《喜多川論文になし》

Table-turning 【p. 190 : B-Ms. 62b】

Table turning/The examples of table talking/

西洋にても Spirit のなす所なりと信ず 【p. 188 : B-Ms. 68b】

《communication by Spirit を挿入。喜多川論文なし》

299 to 300=examples./bias, prepossession 《?》 【Ms. 68b】 《喜多川論文になし》

《299 to 300は頁の数字か》

Explanation of table turning 【p. 188】

不覚運動の例 【p. 188 : B-Ms. 70b】 《喜多川論文になし》

Muscular movements are continually being executed without conscious effort. ……

若し dominant idea のみにあらざれば hat を table の上にのせても宜しかるべき理なり 【p. 188 : B-Ms. 70b~B-Ms. 71b】 《喜多川論文になし》

●「円了の「妖怪玄談」や「妖怪学」に出てくる「コックリさん」の問題は、カーペンターの「精神生理学原理」に出てくるテーブル・ターニング、テーブル・トーキングの話がヒントになっていることは間違いない。「稿録」には、この件についてかなり長い素訳がしめされているが、

これがそのまま「妖怪学」に引用されている。【p. 283】《喜多川解説》
外史評論 【pp. 188-187 : B-Ms. 24b-25b】《手稿の乱丁か》

まとめ（以下の主題は主要な抜書きに限る）

A. 巻頭部分の主題

1. Spence の First Principle of Philosophy, Part 1 The Unknowable, Chapters I. IV. V. VI. VII 等。【Ms. 5b-Ms. 15b】
2. James Legge : Chinese Classics の孟子 (Mencius) に関する記述。【Ms. 16b-18a】
3. 近代西洋哲学思想家の著書から「良心」(conscience) を中心とする道徳の基準に関する記述。【Ms. 19a-Ms. 48a】
4. Murphy の Habit and Intelligence を中心とする「習慣智力論」。【Ms. 48a-Ms. 51b】
5. Schwegler 哲学史英語訳の古代部分。【Ms. 52b-Ms. 112a】
6. Voltaire の哲学辞典から運命 (destiny) の項。【Ms. 113b-Ms. 115b】
7. 哲学・心理学・物理学等の概念に関する諸説。【Ms. 116b-Ms. 129a】
8. 哲学と理学との比較に関する記述。【Ms. 129b-135b】
9. 宗教と理学 【Ms. 136b-Ms. 142b】

B. 末尾部分の主題

1. 宗教に関する諸説。【B-Ms. 2b-12a】
2. 記号・著者・書名 【B-Ms. 12b-23b】 のリスト。(記号の意味は不詳)
3. 中国哲学史。【B-Ms. 26a-32a】
4. An Epitome of the History of Philosophy. 【B-Ms. 34a-38b】
5. 中国哲学史。【B-Ms. 39a-58b】
6. 潜在意識論・Table-turning。【B-Ms. 59b-71b】
7. 『日本外史』の評論(未完)。【B-Ms. 24b-25b】《喜多川論文の位置による》

2-3. 「稿録」の性質

「稿録」手稿の原形については、書誌的報告がないので、不明である。手元のコピーは巻頭・末尾の両部分は合計213丁もあるので、一冊にしては分厚いと思う。巻頭部分【Ms. 2b】の漢詩冒頭・署名及び【Ms. 3a】と末尾部分【B-Ms. 2b】に円了の丸印が捺印されている。これが正式に抜書きを始めた印であると考えられる故、「稿録」は2冊であったと推定する。

一語で云えば、「稿録」は哲学・倫理道德・宗教関係の雑多な主題にわたる雑記帳である。元來、縦書きのノートを横書きにして英文を抜書きした為、主題が変わったり、同一主題であっても文献が変わった場合、Ms. a を空白にして Ms. b から書き始めている例が多い（「まとめ」の主題に付した Ms. の頁を参照のこと）。余談であるが、懸命に抜書きしている円了の息使いがを想像することができる。いま、雑記帳と云ったが、当然、抜書きをする動機と目的が在る筈である。

前節の巻頭部分、1. 4. 5～9の各項は勉学・西洋哲学研究上の補助的知識として書き留めたものと見ることが出来るが、2、3の2項目は明らかに一つの目的をもって、文献を当りながら書き留めたものと見ることが出来る。その目的とは論文「排孟論」の準備のためであり、使用した主要文献は James Legge (1815～1897) の Chinese Classics (The Chinese Classics : With A Translation, Critical And Exegetical Notes, prolegomena, and copious indexes, in five volumes, Hong Kong : Legge ; London : Trubner, 1861-1872) と Bain : Moral Science : A Compendium of Ethics, 1869である。その詳細は次節3-1に譲る。ただ、「排孟論」は明治17年1月25日、2月25日（『東洋学芸雑誌』28、29号）に発表されている。「稿録」の日付は明治16年秋であるから、論文の準備を始めてから4～5ヶ月で論文を完成している。一方、末尾部分に就いていえば、未完の「外史評論」は明治16年10月25日に発表された「読日本外史」（『東洋学芸雑誌』

25号)の下書きとすれば、これも明確な目的を持って書かれたものである。このように見てくると、「外史評論」の位置は喜多川論文より手稿の位置の方が自然と思われる。また、この限りでは、末尾部分の抜書きは巻頭部分より早かったと云えよう。なお、前掲の「a-z、以-利」の項目の「小見出し」の書き込みの中、墨書の書き込みの幾つかは『哲学要領 後編』の項目と一致する故、この書き込みは『哲学要領 後編』の執筆を始めるに際して、改めて点検整理した時、記入したものと考えてよい。しかし、三浦節夫氏の調査によれば『哲学要領 前編』は明治19年8月5日、「令知会雑誌」29(明治20年1月5日、「教学論集」37と内容は同じ)号の掲載を以って完結し、同年9月に出版されている。したがって、『同 後編』の執筆開始の時期を断定することはできない故、円了が「稿録」を再点検した時期は不明である。

3. 「稿録」の展開

3-1. 「排孟論」

「排孟論」は『東洋学芸雑誌』第28・第29(明治17年1月25日、2月25日)に発表された円了の本格的学術論文として最初のものといえる。『哲学要領』や『真理金針』を執筆していた円了の論文としては「排孟論」は異質である。しかし『孟子』をめぐる論争・批判は突如始まったのではない。加藤弘之『経歴談』(日本の名著34 p.483)によると、大学が東京大学になる前の明治2・3年、「皇学と漢学」を教えていた大学本部で、皇学の教官丸山作楽が『孟子』は「禅讓・放伐を是とするものなれば、わが邦の国体に大害あり」と、大学でこれを教授することに反対し、これに対して水本成美は『孟子』の害のある点は採らないまでのこと、「その他に『孟子』の教えに善きこと多し、けっして『孟子』を全廃するべからず」と「はなばなしき議論」があったという。また加藤弘之は『国体新論』・総論において、「国土をもって君主の私用とし、

人民をもって君主の臣僕とせしものなること明らか」なる『孟子』の「富、天下を有つ」（『孟子』万象上篇）の文を挙げ、『孟子』の民本主義を表す「民を貴しとなす。社稷これに次ぐ。君を軽しとなす」（『孟子』尽心下篇）との「表裏矛盾」を指摘して、「天下国土の所有主なる君主をもって、その国土の食客なる人民より軽しとする理あるべきや」と『孟子』を非難している。「排孟論」はこの理論的『孟子』批判の中に位置付けることができるが、学術論文として客観性を持っている。

円了の批判は以下の通りである。

（性論について）

先ず冒頭において、支那哲学の中で、性質を異にするのは「性論」である。孟子以後の学者はすべて性の善悪を論じている。孟子は善、荀子は悪、楊雄は善悪混とする。韓愈は3品あるとする。その他、復性説、本然の気質の論あり、一定しなが、一般的には性善論である。「性論」の提唱者は孟子であると述べ、孟子の「性善説」を引用・紹介することから論述を始めている。《[p. 195 : B-Ms. 45b-46a] 『倫理通論』15章 p. 29参照》

《楊雄：成都の人、天鳳五年（AD 1）『太言』、『法言』易と論語に似せて書かれた。孟子と荀子の性論を折衷する性説を説く。「人の性は善悪混ず、其善を修れば善人となり、其悪を修れば悪人となる」（法言九君子）：武内義雄『中国思想史』p. 176、王充（AD 27）『論衡』本性篇世碩、公孫尼子、孟子、告子、荀子、董仲舒、劉向、楊雄等の性論を列叙して「未だ必ずしも実を得ず、実とは性に善あり悪あるは猶人才に高あり下あるが如きなり、孟子が人性善といえるは中人以上なる者なり、孫卿が人性悪といえるは中人以下なる者なり、楊雄が善悪混ずるといへるは中人なり」（同前 p. 179）]

[韓愈：長慶四年（824）57歳で没。原人、原道、原性の3篇。原性篇で

人の性には上中下の三品があり、上者は純善、中者は善悪、下者は悪、という。(同前 p. 239)、[復性説：(同前 p. 101)]》

(孟子説) (小林勝人訳注『孟子』上下 岩波文庫 2006・1による)

「仁義礼智非由外鑠(鑠)我、固有之也」(告子章句上-6)：仁義礼智は外より我を鑠る非ざるなり。我固より之を有するなり。「されば、この仁義礼智の四つの徳は、自分の心を外から鍍金して飾りたてたもの(いわゆる付け焼刃)ではなく、もともと自分の心に持っているものである。」下 p. 235

「人性之善也、猶水之就下也、人無有不善、水無有不下」(告子章句上-2)：人の性の善なるは、猶水の下きに就くがごとし。人善ならざることあることなく、水下らざることあることなし。「人間の本性ががんらい善であるということは、ちょうど水がほんらい低い方へ流れるのと同じようなものだ。だからこそ、人間の本性には誰しも不善なものはなく、水には低い方に流れていかないものはないのだ。」下 p. 221

「人皆有不忍人之心」(公孫丑章句上-6)：人皆忍びざるの心有。「人間なら誰でもあわれみの心(同情心)はあるものだ。」上 p. 141。

「仁人心也」(告子章句上-11) 仁は人の心なり。「仁は人間の本来持っている心であり、」下 p. 254

「堯舜性者也」(尽心章句下-33) 堯舜は者(これ)を性のままにし、「堯や舜は、べつに修養もせずに天性のままに行動しても、おのずから仁義の道にかなった人々である。」下 p. 427 (尽心章句上-30では「者」は「之」、饒舜は之(仁)を性のままにし、)

(孟子以前の性論と孟子説の独自性)

次に孟子以前の説を検討するため以下の諸書を引用し、孟子説の独自性を主張している。

詩・大雅：「天生蒸民、有物有則、民之秉夷(秉夷へいせい)、好是懿徳：天の蒸民を生ずる、物あれば則あり。民の夷(性)に秉(順したが)

うや、この懿徳（美德）を好む」（告子章句上-6に引く詩経大雅蒸民の扁）；これは性善説の萌芽。

易・繫辭：「一陰一陽之謂道、繼之者善也、成之者性也」（一陰一陽これを道と謂い、これを継ぐは善、これを成ずるは性なり）

中庸：「天命之謂性、率性之謂道」（天の命ずるをこれ性と謂う。性に率うをこれ道と謂う。第1章）、「天が、その命令として〔人間や万物のそれぞれに〕わりつけて与えたものが、それぞれの本性である。その本性のあるがままに従って〔とそこにできあがる〕のが、〔人として当然にふみ行うべき〕道である。」岩文 p. 143。

「自誠明謂之性、自明誠謂之教」（誠より明らかなる、これを性と謂う。明らかなるより誠なる、これを教えと謂う。第12章）「〔天の道としての〕誠が完全に身に備わっていて、そこから〔現実的な立場で〕ほんとうの善をはっきりと見むいてゆくのを、それを本性そのままのことという。〔反対に、現実的な立場で〕ほんとうの善をはっきりと認識して、〔それを積みあげていって〕そこから完全な誠にゆきつくのを、それを〔道を修める〕教えのことという。」（金谷治訳注『大学・中庸』岩波文庫 2006・4、p. 208）

論語には明文はないが、「人之生也直、罔之生也幸而免」、「道不遠人」は性善説の萌芽といえる。

しかし、孟子は以上の説に基づいて立論したのではないが、彼は初めて、性善として、性を論究し、人に「良心」がある理由を証明したと序論を結んでいる。ここで注目すべき点は「且つ之（性善）を論究して人に良心ある所以を証明せしは孟子を以て濫觴とす、是れ孟子の性善説の祖先たる所以なり」という結語において「良心」という用語を用いていることである。

（良心）

以下西洋の学説に視点を定めて、「排孟論」は本論に入るのである

が、「上世希臘学者中」にも「人の性本来善なる事」を信じる者もいたが、その説は「孟浪として分明ならざるを以て定論を考索する甚だ難しとす」として考察を避け、「中世以後に至りては学者中其論ずる所判然たるのみならず、良心固有の例を徴して其理を究明するものあり」と、バトラ師 (Joseph Butler 1692~1752) をはじめ近代西洋思想家の「良心説」の検討を始める。当然、円了の考察の前提には、孟子の「惻隠、羞悪、辞讓、是非の心」がある。考察の対象とされた西洋思想家は、バトラ (Joseph Butler 1692~1752) (p. 248 上) : 人には第一に仁愛の天性がある、第二に公私の善道を求める情がある、第三に行為の善悪を識別する反省力があり、これらを具えている。孟子の「惻隠、羞悪、辞讓、是非」の心とその義は同じ。

(p. 248 上) : 人間は自然の善性を保持することができず、逆に善性を傷つける。この説を敷衍すれば、人が悪を為すのは善性を傷つけたことに由る、といえる。

「稿録」【pp. 271-270 : Ms. 17b-18a】 : Let us Mencius' words be compared with the language of Butler in his three famous sermons upon Human Nature. He shows in the first of these.

“First, that there is a natural principle of benevolence in man ; secondly, that (p. 270) the several passions and affections, which are distinct both from benevolence and self-love, do in general contribute and lead us to public good as really as to private ; and thirdly, that there is a principle of reflection in men, by which they distinguish between approve and disapprove their own actions.” 此の一章は孟子の人に仁義の端ある証と同じと知るべし。

Butler says in the conclusion of the first discourse that : “Men follow their nature to a certain degree but not entirely ; their actions do not come up to the whole of what their nature leads them to ; and they often isolate their

nature.”

これ孟子の BK. II, pr. 1.17.6 BK. VI, pr. 1, V 17にある如く、仁義等の四端を失するときは、自身を賊するものと云うに应ず、又、之を妍くと不妍とによりて、人の知の異なるの理に当る

【孟子引用】人之有是四端也、猶其有四体也、有是四端也而自謂不能者自賊者也、謂其君不能者賊其君者也《『孟子』卷第三 公孫丑章句上》

『孟子』の引用：(p. 248下)。孟子曰く「牛山の木嘗て美なりき。その大國に郊たるを以て、斧斤之を伐る、以て美とすべけんや。是れ其の日夜の息う所、雨露の潤す所、萌・の生ずるなきにあらざるも、牛羊又従いて之を牧す、是の以に彼の如く濯濯たるなり。人その濯濯たるを見て、以て未だ嘗て材あらずとなさんも、此れ豈山の性ならんや。人に存する者と雖も、豈仁義の心なからんや。其の其の良心を放つ所以の者も、亦猶斧斤の木に於けるがごときなり。」(告子章句上 p. 241)「牛山は以前は樹木が鬱蒼と生い茂った美しいやまであった。だが、齊の都臨淄という大都會の郊外にあるために、大勢の人が斧や斤でつぎつぎと伐りたおしてしまったので、今では美しいやまとはいえなくなってしまった。……木のないのがどうして山の本性であろうか。いやいや、決して山の本性ではないのだ。[ただ山ばかりではない]、人間とてもそれと同じこと。生来持って生まれた本性の中に、どうして仁義の心(良心)がないはずがあるか。ただ、人がそういう本来の良心を放失してしまうわけは、やはりまた、斧や斤で木を伐るのと同じなのだ。」下 p. 244

孟子曰く「水は信に東西に分つことなきも、上下を分つことなからんや。人の性の善なるは、猶水の下きに就くがごとし。人善ならざることあるなく、水下らざることあるなし。今夫れ水は、ちて之を躍らさば、額を過ぎしむべく、激して之を行れば、山に在らしむべし。是れ豈

水の性ならんや。其の勢い則ち然るなり。人の不善を為さしむべきは、其の性も亦猶是のごとければなり。」(同前 p. 220)「確かに水には東に流れるか西に流れるかの区別がないのは本当であるが、しかし高い方に流れるか低い方に流れるかの区別までもないことがあろうか。(よもやそんな事はあるまい)。人間の本性ががんらい善であるということは、ちょうど水が低い方へ流れるのと同じようなものだ。だからこそ、人間の本性には誰も不善なものはなく、水には低い方に流れていかないものはないのだ。だが、今もし、その水でも手で拍って跳ねとばせば、〔水しぶきは〕人の額よりも高く上げることができるし、また、流れをせき止めてはげしく逆流させれば、山の絶頂までも押し上げることができよう。だがしかし、それがどうして水の本性であろうか。外から加えられた勢力がそうさせるまでのことだ。人間が時に不善をなすうるのも、決してその本性ではなくて、これと同じく〔利害とか財物などの〕外からの勢力に激発されるから、そうなるのである。』下 p. 222。

(p. 248 下) : バトラのホップ氏自愛論にたいする論駁は、孟子が楊朱を排したのと同じ(「孟子曰く『楊子は我が為にす。一毛を抜きて天下を利するも、為さざるなり』」尽心章句上-26、「孟子がいわれた。『楊朱は〔極端な個人主義者であるから〕、万事自分本位にしか考えない。だから、たとえわずか髪の毛一本抜くぐらいのことで大いに天下の為になるとしても、決してそれをしない。……』」下 p. 353。上巻-p. 256にも出る、「楊朱は我が為にす、是れ君を無みするなり」為我 = 個人主義)。

[p. 270 : Ms. 18b] More particularly against Hobbes, denying all moral sentiments and social affections, and making a regard to personal advantages the only motive of human action, it was his business to prove that man's nature is of a very different constitution, comprehending disinterested affections, and above all the supreme element of conscience, ……

プライス (Richard Price 1723~1791) (p. 248下) : プライスのアヘ心論はバトラの説と同類。

【p. 263 : Ms. 34a】 As regard to the psychology of Disinterested Action, he provides nothing but a repetition of Butler.

アダム・スミス (Adam Smith 1723~1790) (p. 248下) : 同情、相憐、つまり惻隠の情を善行の基礎とする。

【p. 262 : Ms. 34b】 In the Psychology of Ethics, Smith would consider the moral faculty as identical with the power of sympathy, which he treats as the foundation of Benevolence. A man is a moral being in proportion as he can enter into, and realize, the feeling, sentiments, and opinions of others.

リード Thomas Reid (1710~1796) (p. 248下) : 人には本来良心があり、事の理非、行の善悪を判定する。良心は人間に固有のものであるが、教育経験により発達するとする点は孟子と異なる。その性力は動物には存在しないとする点は孟子と同じ。

【p. 262 : Ms. 35b-36a】 By an original power of mind, which we call conscience or the moral faculty, we have the conception of right and wrong in human conduct, of merit (and) demerit, of duty and moral obligation, and our other moral conceptions : and by the same faculty, we perceive some things in human conduct to be right, and others to be wrong. Hamilton remarks that this theory virtually found morality on intelligence.

Conscience は孟子の良心に似たり《書き込み、「稿録」 p. 262 喜多川論文になし》

Regarding Conscience, Reid remarks, 1st that all other powers it comes to maturity by insensible degrees, and may be a subject of culture or education. He takes no note of the difficulty of determining what is primitive and what is acquired.

良心には、本来有するものと、教育によりて生ずるものありとす、これ孟子と異なる所なり。

Secondly, Conscience is peculiar to man; it is wanting in the brutes.

是れ孟子も同じき所なり。

Thirdly, it is evidently intended to be the director of our conduct; and fourthly, it is an active power and an intellectual power combined.

The views of Reid is adopted by Stewart.

ステワルド (Dugald Stewart 1753~1828) (p. 249上) : ステワルトの善心固有説はリードと同じ。

[p. 262 : Ms. 36b] The standard is internal or intuitive—the judgments of a Faculty, called the Moral faculty.

「ステワルド」は「リード」の如く、人に本来、固有の良心ある事を説く故に子も又孟子の派なり

ブラオン (Thomas Brown 1778~1820) (p. 249上) : ブラオンも主張。

[p. 261 : Ms. 36b] As regards the Standard, Brown contends for an Innate Sentiment or moral sense.

氏も本来の性を説くものとす

ホエウェル (William Whewell 1794~1866) (p. 249上) : 道徳は人の常性であり、人生の目的は功利のみでなく、道心に一致していることによって決められる。

[p. 260 : Ms. 41a] Morality has its root in the common nature of Man ; a scheme of Morality must conform to the Common Sense of Mankind, in so far as that is constituent with itself. Happiness is not a sufficient end in itself ; morality is also in end itself. Human happiness is not to be conceived or admitted, except as containing a moral element.

フレデリック・フェリア (James Frederick Ferrier 1808~1864) (p. 249

上)：人は生まれながら良心となる「元種」を持つ。

【p. 260 : Ms. 41b】 He says : “some writers-Hutcheson, for example, — are of opinion that man naturally has a conscience or moral sense which discriminates between right and wrong. That man has by nature and from the first, the possibility of attaining to a conscience is not denied. That he has within him by birth something out of which conscience is developed, I firmly believe.”

氏の意にては、人は本来良心のなるべき元種を有するものとす

マンセル (Henry Longueville Mansel 1820~1871) (p.249上)：良心は天賦

【p. 259 : Ms. 42a】 That the conceptions of right and wrong are sui generis is proved. 1. by the fact that in all languages there are distinct terms for right and agreeable ; 2. by the testimony of consciousness ; and 3. by the mutual inconsistencies of antagonists of a moral sense. The intuitive element may be called conscience.

The representing element is the understanding. The standard of right and wrong is the moral nature of God.

氏も亦良心なるものは天より人の受け来るものとす

(**本性と良心**)

次いで、キリスト教と仏教の「性説」(キリスト教：人は神禁を犯したので「良知、良能」を失ったが、自由意志をもち、本来良心を具えている。

仏教：智度論「一切法、皆空分あり、諸法中、皆涅槃性あり、是を法性と名づく」。佛教のいう性は善悪未分の心の本体を指す。これが動きだし善悪となるのであるから、性というより情というべきである。したがって、儒教の性と仏教の情は同一に論じる事はできない) に少し言及した後、円了は孟子批判に転じている。その批判は「論理上一事を論ぜん」と欲せば、先ず其義を下し、其何ものたるを定めて、而して後善悪に及ぶべし、然るに孟

子は性の定義与えざるを以て、其本義一に定まらず」と云う点にあった (p. 249上)。円了の理解では、孟子の「性」とは「総ての人の本性^{インスティンクト}を指すものの如く、又特に良心^{コンシエンス}を義するものの如し」であった。ここで円了は「西洋にては是両語の義一定せずと雖も、本性^{インスティンクト}と良心^{コンシエンス}とは決して同一なるものにあらず」として、「本性」については

ベーネ (Alexander : Alexander Bain 1818~1903) : 教育、経験によっては得られない本来の能力である。

フィスク (John Fiske 1842~1901)、(p. 249下) : 肉体的自動を反動作用 (レフレキスアクション) といい、心理的自動を本性 (インスティンクト) という。

スペンソル (Herbert Spencer 1820~1903) (p. 249下) : 本来固有の能力の総称であり、7種に分けられる。1. 反動作用、消化器、呼吸器などの作用。2. 協合応和の動作、手足の交互の動き。3. 自発の活動、身体が自然に動く勢力。4. 情緒の表現力、喜怒の感情の具体的反応。5. 執意の萌芽、意志の基礎となるもの。6. 弁別力、7. 信念力。

以上3人の説を挙げるが、「稿録」に直接対応する記述はないが、他にリボーの説が見られる。

【p. 220 : Ms. 127a】 Ribot's Heredity

智力と性力 (instinct) は different only in degree part in kind, 《喜多川論文になし》

Thus, he defines instinct is an unconscious mode of intelligence. Instincts are only habits fixed by heredity.

性力は慣習の遺伝したるものに過ぎずとする。

遺伝は生理上の一理法とす (是を以て、又心理を証明することを得)。

Buckle は遺伝は偶然に属するが如く論ずるを以て Ribot 之を駁す Ribot 遺伝法を分けて直接の問題、間接、影響。

「良心」については

ベーン、(p. 250上)：是非、善悪を判断し、悪を去り、善に就かんとする心力を指す。

【p. 268 : Ms. 22a】 Bain's Moral Science (V. 40)

Ethical theory embraces certain questions of pure psychology.

1. The psychological nature of conscience, the moral sense, or by whatever name we designate the faculty of distinguishing right and wrong, together with motive power to follow the one and eschew the other. ……

アベルクロンバー (John Abercrombie 1780~1844) (p. 250上)：愛欲の情を規定・制限する力。

【p. 269 : Ms. 20b-21a】 To act under the influence of conscience is to perform actions, simply because we feel them to be right, and abstain from others, simply because we feel them to be wrong, without regard to any other impression, or to the consequences of the actions to ourselves or others.

Conscience is the regulating power, which acting upon the desires and affections, as reason does upon a series of facts, preserves among them harmony and order.

ダーウィン (Charles Robert Darwin 1809~82) (p. 250上)：人が一時私情のままに走り、後に公利を想って、不快な思いをする。これが良心である。

これ等の諸説を挙げて、両語の語義を明らかにして「孟子の性と称するもの之を本性となすも、又之を良心となすも、論理上不当のものと謂わざるをえず」と孟子批判を強めている。

(善悪——仁義と不仁不義——の基準なし)

次の批判は「性の善悪」の基準が明確にされていない点であった。つまり「次に孟子の論ずる所法規に合せざるは、性の善悪を論じて善悪の何ものなるを定めざるなり。凡そ事物の善悪を論ずるには、先ず其標準

を定めざるべからず、標準なふして善悪の分別起るべき理なし、孟子はなにを以て標準とせしや」というのである。円了は善悪の基準を「或は云わん、其善とは仁義にして其悪とは不仁不義なり」と代弁して、仁義についての批判を展開する。

(『孟子』の引用) (p. 250下) : 「仁天之尊爵也、仁人之安宅也」(公孫丑章句上)、「そもそも仁は天から授けられた何よりも尊い爵位であり、人が最も安心して住むことのできる家でもある。」上 p. 143。

「仁人心也」(前出 下 p. 254)

「仁也者人也」等

この文では、「性」は「仁」、「義」である、と言うに過ぎない。換言すれば、「性」は「仁義」の基礎ということになる。ところが、「性」の定義がなければ「仁義」は解らず、「仁義」が解らなければ「善悪」を判定することはできない。つまり「循環推論」に陥る。

(社会進化の理による仁義の批判)

「社会進化の理」からいえば、絶対不変の理論は存在しない。仁、義、善、道と云っても、時代に応じて変化する。孟子の云う仁義のみが不変であるとはいえない。

(悪心の生じる原因の看過、孟子は善のみを云う)

(『孟子』の引用) (p. 251下) : 「仁義礼智非由外鑠我也、我固有之也、弗思耳矣」: 仁義礼知は、外より我を鑠(かざる)るに非ざるなり。我固より之を有するなり、[自ら] 思わざるのみ」(告子章句上-6) 「前出ただ、これを人々はボンヤリしていて自覚していないだけのことだ」。
下p. 235。

「人之所不学而能者其者良能也、所不慮而智者其良智也、孩提之童無不知愛其親也、及其長也、無不知敬其兄也、親親仁也、敬長義也、無他、達之天下也」: 人の学ばずして能くする所の者は、其の良能なり。慮らずして知る所の者は、其の良知なり。孩提の童も其の親を愛することを

知らざる者なく、其の長ずるに及びて、其の兄を敬することを知らざる也（もの）はなし。親を親しむは仁なり。長を敬するは義なり。〔善を為さんと欲せば〕他なし。之を天下に達（おしおよ）ほすのみ」（尽心章句上-15）「およそ人間にはとくに学ばなくとも自然によくできるという能力（すなわち良能）があり、あれこれと考えなくとも自然に分るといふ知恵（良知）がある。〔いずれも生まれながらに備わっているものである〕。さればこそ、二、三歳の幼児でさえも、自分の親を親しみ愛することを知らないものはなく、やや大きくなると、自分の兄を尊敬することを知らないものはない。（これがつまり良知良能なのである）。ところで、この親を親しみ愛するのは仁の心であり、目上を尊び敬うのは義の行ないである。ゆえに、善すなわち仁義を行ないたいと思ったら、外でもない、ただこの親を親しみ目上を敬う心を広く天下の人々に推し及ぼすだけのことである。」下 p. 225。

この反証としてロック（John Lock 1632～1704）説を引く。

（p. 251下）ロック：ロックは人に固有の良心がない理由を証明しようとして、野蛮人と無教育的な兵士を例にとり証明した。したがって、惻隠・不忍人の心は人に固有のものではないことが知られる。

【p. 257：Ms. 47b】「ロック」氏は人に本来固有の善心なき所以を証せんと欲し、引くに野蛮人中往々隣人を殺害して更に愛憐の心を生ぜざるを以てす。

并に、従前教育を受けたる兵卒を以てす、野蛮人中、兵卒中には、都城を襲撃して、其民家を劫掠して却って名誉となし更に悔悟の情を生ぜざりしと云う、然れども、ロック氏は、人の善悪の生には生来善悪の別なし 其之かる、経験より生ず

荀子の性悪を論ずるが如し 《末尾部分の An Epitome of the History of Philosophy に続く中国思想史【p. 198～】の抜粋中に、孟子について “He proved this by taking the existence of conscience or moral sentiment,

which is possessed by every man.”とあり、また荀子について“According to him it is only thorough experience and education that man becomes good. In this point his view agrees with Lock.”【p. 195 : B-Ms. 45b-46a】とある》。

(本性資質は外物・外力により変化する)

人の本性資質は遺伝による。この資質が気候、食物などの外物と教育、経験の外力によって変化し、各人各様の性質を形成する。たとえ外物と外力が同じでも、親からの遺伝により性質は相違する。したがって、人の性質を一方的に善とは言い切れない。また、一人の人に善と悪が共存している。「^{ロウオブレチチビチー}對待理法」から云っても善と悪は相対するものであり、孟子の性善説は成立しない。

(苦楽：進化論)

人の性を「自然の勢」に任せる時、「其勢苦を去り楽に就かん」とするものである。

フィスク氏曰く「楽あるは保生を進捗する所以にして、苦あるは損命を妨礙する所以なり」と。この意味は、人間に苦を避け楽に走る性があるのは、長生きして生存を全うする所以である、と云うことである。これを敷衍して言えば、人類が滅亡せず、存在しているのは、「苦を去り楽を求める」性があるからである。「人性は唯進化の作用による所の一結果」である。まさに孟子が云うように「人性之善也、猶水之就下也」(告子章句上-2)である。しかしこの種の「性」は人類のみではなく禽獣にも具わっているのであるから、孟子の云う「性」はこの種の「性」でなく、進化の理に反することは明らかである。(p. 253下)

(惻隠、羞惡、辭讓、是非の各論—統篇)

(『孟子』の引用)(続 p. 277上～下)：「孟子曰、人皆有不忍之心、先王有不忍人之心、斯有不忍人政矣、以不忍人之心行不忍人政、治天下可運之掌上、所以謂人皆有不忍人之心者、今人乍見孺子將入於井、皆有怵惕惻

隱之心、非所以内交於孺子之父母也、非所以要譽於鄉党朋友也、非惡其声而然也、山是觀之、無惻隱之心非人也、無羞惡之心非人也、無辭讓之心非人也、無是非之心非人也、惻隱之心仁之端也、羞惡之心義之端也、辭讓之心礼之端也、是非之心智之端也、人之有是四端也、猶其有四体也、有是四端也而自謂不能者自賊者也、謂其君不能者賊其君者也、凡有四端於我者、知皆拔而充之矣、若火之始燃泉之始達、苟能充足以保四海、苟不充之不足以事父母：」（公孫丑章句上-6）。「人間なら誰でもあわれみの心（同情心）はあるものだ。むかしの聖人もいわれる先王はもちろんこの心があったからこそ、しぜんに温かい血の通った政治（仁政）が行なわれたのだ。今もしこのあわれみの心で温かい血の通った政治を行なうならば、天下を治めることは珠でも手のひらにのせてころがすように、いともたやすいことだ。では、誰にでもこのあわれみの心はあるものだとどうして分るのかといえ、その理由はこうだ。たとえば、ヨチヨチ歩く幼な子が今にも井戸に落ちこみそうなを見かければ、誰しも思わず知らずハッとしてかけつけて助けようとする。これは可愛想だ、助けてやろうと〔の一念から〕とっさにすることで、もちろんこれ（助けたこと）を縁故にその子の親と近づきになろうとか、村人や友達からほめてもらおうとかのためではなく、また、見殺しにしたら非難されるからと恐れてのためでもない。してみれば、あわれみの心がないものは、人間ではない。悪をはじにくむ心のないものは、人間ではない。譲りあう心がないものは、人間ではない。善し悪しを見わける心のないものは、人間ではない。あわれみの心は仁の芽生え（萌芽）であり、悪をはじにくむ心は義の芽生えであり、譲りあう心は礼の芽生えであり、善し悪しを見わける心は智の芽生えである。人間にこの四つ（仁義礼智）の芽生えがあるのは、ちょうど四本の手足と同じように、生まれながらに具わっているものなのだ。それなのに、自分にはとても、〔仁義だの礼智だのと〕そんな立派なことはできそうにないとあきらめ

るのは、自分を見くびるというものである。またうちの殿様はとても仁政などとは思ひもよらぬと勧めようもしないのは、君主を見くびった失礼な話である。だから人間たるもの、生まれるとから自分に具わっているこの心の四つの芽生えを育てあげて、立派なものにしたいものだと自ら覚りさえすれば、ちょうど火が燃えつき、泉が涌きだすように始めはごく小さいが、やがては〔大火ともなり、大河ともなるように〕いくらでも大きくなるものだ。このように育てて大きくしていけば、遂には〔その徳は〕天下をも安らかに治めるほどになるもののだが、もし育てて大きくしていかなければ〔折角の芽生えも枯れしぼんで〕、手近な親孝行ひとつさえ満足にはできませんまい。」和訳：上 p. 140-p. 142。

これが孟子の性善説の論拠である。

(惻隱の心)

ホブズ (Thomas Hobbes 1588~1679) (続 p. 277下)：「他愛は自愛より生ず」、「人の危難を見て惻隱の心を生ずるは、自己の身上に危難を受くるが如く想像するより発す」。

【p. 265 : Ms. 28b-29a】 He says : Pity is grief for the calamity of another, arising from the imagination of the like calamity befalling one's self ; ……惻隱の心は自分の身の上に均しき害のおこること想像するより生ず

According to him, in the natural condition Self-interest, of course, is the Standard. He says, “disinterested Sentiment is, in origin, self-regarding, such as pity.”

「ホブズ」は専ら自愛説を主唱するを以て、他愛は其本源、自愛より起ると云う。

この説からいえば、「自愛の他に他愛なく、私利を去り公利なきなり」。「人の心思と外貌とは密切なる関係」がある。喜怒の感情は顔に出る。人はこれを経験することによって、人の苦楽を推察できるようにな

り、他人の苦に耐えることができず、惻隱の心を起こすのである。惻隱の心は他愛の端ではなく、自愛の餘である。孟子はこれでも惻隱の心を「善」とするのか。

(羞惡の心)

フィスクの良心発生説（続 p. 278上）：人は常に公益心を持っているが、一度、私欲が起ると、私欲は強烈であるので公益心を抑える。しかし、私欲は強烈ではあるが、永続性はない。知力により反省すれば、良心を生じ、悔悟の念を生じる。

ダーヴィン（続 p. 278上）：ダーヴィンの「人類成來論」中の説も同じ。物の理として、「縦が深ければ横は浅く、横が長ければ縦は浅い」。この理論から、私情の力は横に強いのでその時短く、公益心は、縦に長いので私情一時の力は、私情のように強くはない。したがって、私情は一旦起ると抑え難いが、公益心は記憶の中に潜在しているので、私情が鎮まると、公益心を想起して悔悟の良心が起る。そうして自分の不善を恥じる心が生じると、当然、他人の悪を憎むようになる。

(辞讓の心)

「己を退けて人を推すの心なり」。この心は教育・経験により得られる結果であるが、根源的には「自己の生を保ち樂を全ふせんとするの性より發する」心である。換言すれば、これは「人を崇敬するの情に出ずるにあらずして、自己を愛重するの心に生ずるなり」。人は社会において敬辞讓を尽して、これが自分に利益があることを知り、再三経験すると、それが習慣となり受け継がれて一種の良心を形成するにいたる。

(是非の心)

ヒューム（David Hume 1711～1776）及び功利主義者（続 p. 279上）：善惡を識別する良心は、各人が経験した苦樂の感覺から派生する。

ベーコン（続 p. 279上）：人が善惡を識別する力があるといっても、それが

天賦のものとはいえない。如何なるものであれ、習慣因習が長ければ、一種の性を形成する。したがって、「気性習成の理」と「観念連合の力」により、苦を憎み悪とし、楽しいものを善とするようになる。そうして、究極的には、善悪を識別する「天性」となる。

【p. 267 : Ms. 25a, 26b】 The Immediateness of a judgment is no proof of its being innate ; long practice or familiarity has the same effects.

我々が数度手がけたる事は猶予思考を勞せずして、直ちに判知する事を得。

The action that always brings down punishment, would be associated with the pain and the dread of punishment.

人一事を成して刑戮或は督責を受くる事再三に及ぶ中は思想の統合によりて其事をなさんとせば、忽ち苦痛を感じずるに至る。

【p. 266 : Ms. 26b】 Association of Pain

Action that have long been connected in the mind with pains and penalties, come to be contemplated with a disinterested repugnance.

縦ひ人自身は生来、他人の叱責に遇はざるも其の他全く道德の理を知らざるに至らず 他なし自ら試験せざるも他人の例を見、或は public opinion の為に制せられて然る也

この理論よりいえば、孟子が愛心とする惻隱の心は、自愛自利の心から起こり、天賦の良心とする羞惡・辞讓・是非の心は苦楽の経験より生じ、自愛自利は苦を避け楽を求める情に他ならないのであるから、仁義礼知の四端は苦楽の感覚が発達分化したものである。

(再び苦楽と良心)

ハミルトン (Sir William Hamiltom 1788~1856) (続 p. 279下) : 楽は意識の作用する力が自然に動き出す反応であり、苦はその作用の力が抑止されて自由にならない反応である。

モーズレー（続 p. 279下）：向って行く力を強める情思は楽の感覚に従い、拒む力を生じる情思は苦の感覚に従う。

スペルソン（続 p. 279下）：楽は意識内に保存しようとする感覚であり、苦は意識の外に棄てようとする感覚である。

「苦を去り、楽に就かん」とする「原性」は人間も動物も等しく具えている。これが人間特有の「良心」となるのは、生存競争（外的）、遺伝（内的）の結果、つまり自然淘汰の作用・影響である。

（自己愛が博愛となる理由）

外的事情：競争・淘汰の中で、一人で生きることは困難であり、自然に、団結して強弱両者が協力するようになる。この結果、君臣上下の別、分業が生まれる。こうして、社会制度が成立すると、個人の快樂を願うと共に衆人の快樂をも願い、個人の生を全うするために、社会の繁栄を願うようになる。この衆と共に楽しむ情も人を愛し、物を憐れむ心も「自生自利を達せんとする性」より起こる。これは「仁義の良心」に他ならない。公私自他の幸福を増進するものを善とし、妨害するものを悪とする。したがって、善悪の基準は苦楽禍福に他ならない。

ブレイ（Charles Bray 1811～1884）（続 p. 281上）：人には苦楽福過の別がある故、善・悪の別が生まれる。幸福を生むものを善とし、過患を来たすものを悪とする。

内的事情：習性・連想・賞罰・教育など。習性とは再三反復する性。連想は観念聯合であり、動作と感覚が連続して起こるとき、その間に相互の附着聯合があり、一に触れると他を自ずから想起する力。これは習性から生じる。

（内力—習性、連想、賞罰、教育—の作用）

習性・連想

モルフェー（Joseph John Murphy 1827～1894）（続 p. 282上）：（p. 281下）：

「習性知力論」中に其義解を下していわく、習性なるもの之を大にしては、諸生物の動作性質を反復因襲して子孫にまた遺伝すべき一種の性法に与うるの名にして、有識無識両作用の基礎となり、且つ観合聯合の性法も、此一部に属するものなりと、

【p. 257 : Ms. 48b】 Habit and Intelligence by Murphy

習慣なるもの、之を大にしては諸生物の動作性質の反復、因襲して子孫にまた遺伝すべき一種の性法に与ふるの名にして、有識、無識両作用の基礎となるものとす、故に観念聯合の性法も此一種に属するものと云えり。

【p. 218 : Ms. 131a】 Murphy's Habit and Intelligence

氏はHabitを以てUnconscious & conscious lifeの原理とし、又life of mindの原理とす 連想の理法も其一部なり

習性と連想の二力の作用により、苦楽の感覚が進化して善悪の良心となる所以は一

ミル (続 p. 282上) : 思想は常に思想を伴い、観念は常に観念に従う。したがって、覚官が活動している間は、感覚は休まず感応していて、一感覚が起ると必ず一観念が起る。そうして一観念が起ると他の観念が起る。

マッキントス (続 p. 282上) : 諸観念が聯合する時、各観念は異なったものと結びつく。「反復因習」する本性が発達して、互いに「聯合する力」を生じ、動作・感覚・思想はすべて「聯合伴生」し、その観念は一物から他物に及び、有形のものから無形のものに入り、事実から虚想に移り、遂には全く経験したことの無いものを想うようになる。

【p. 268 : Ms. 23b-24a】 (d) It may be affirmed that although we have not by nature any purely disinterested impulses, they are generated in us by associations and habits, in a manner similar to the conversion of means into

final ends, as in the case of money. This is the view propounded by Mill and Mackintosh.

It is still maintained in the present work, as by Butler, Hume, Adam Smith and others, that human beings are (although very unequally) endowed with promoting to relieve the pains and add to the pleasures of others, irrespective of all self-regarding considerations ; and that such promoting is not product of association with self.

この理論から推論すると、苦楽の感情が発展して、善悪を想うようになるのは当然である。習性・連想といった「内力」は、進化・淘汰といった「外勢」に感応して、次第に発達し、「人為の方法」により一層強大になる。「人為の方法」とは「父母の教育・学校の訓導・政府の法律・宗教の神誠・社会の輿論など」である。これらの「人為の方法」は「勸懲啓導」するもので、人に「悪行を戒め、善心を求める」気質を育成する。したがって、人の良心は「進遷変化」の結果であり、孟子のいう「一種定まりたる資性」、「尽く同一」のものではない。

カルペントル（続 p. 282下）：氏其心理学中に論じて曰く、曲・直を裁定する性力は要するに、人種・教育・習性・連想等に属するを以て其標準とする所、各人同一なる能わず、甚しきに至りては、全く相反するの標準ありと、

ベーン：（続 p. 282下）ベーン氏又之を評して曰く、古今万国善悪を断定するに、其説の合同する事少しと、

[p. 267 : Ms. 25a] The alleged similarity of men's moral judgments in all countries and times holds only to a limited degree.

広く世界古今の状況を案ずるに、人種の異同によりて、是非曲直の徑庭する事少なきにあらず、一夫数婦は今日開化国にて禁ずるも野蛮国にては禁ぜざるの類なり

*人の有しているものが異なるから、諸説が異なることにはならない。異同があるのは、良心が社会と共に進化した証拠である。

(総括)

円了の論駁：1. 天は具体的に解明されない。天が人に善性を賦与することは誰にも分らない。2. 人間が良心を具えている原因を究明する理論は進化の理法である。

人間は動物から進化したのであるから、人間に具わる良心の起源は動物に存在する。良心の原種は人獣共有の苦楽の感覚である。苦を避け楽を求めるのは生存の為である。生存の為の外部的影響力は気候、食物などの競争であり、内部的影響力は習慣・遺伝の理法である。人間が社会生活を営み、競争するに至り、教育を受けるようになって、苦楽の情は変化し、良心となる。したがって仁義の四端は天賦のものでもなく、偶然に生じたものでもなく、社会進化の結果である。

以上が「排孟論」の内容である。煩瑣を承知の上で、筆者の理解の範囲で「稿録」と対応或は一致する英文を併記したのは、「稿録」冒頭部の一部【p. 271 : Ms-16b-p. 255Ms-51b】は「排孟論」を前提として抜粋書寫されたと推測し、これを検証する為である。

円了は頁を改めて当該部分最初の見出しを「Mencius (孟子)」として、James Legge : Chinese Classics 中の孟子とパトラ師の比較論に注目している。円了は孟子の性善説を良心の論証と評価しつつも、孟子説に性の定義と善悪の基準が欠落していることは、近代西洋の諸説と比較すると、論理的欠陥であると指摘する。

そこで、「Conscience, — see Ethic G. 15. V. IV.」と見出しを改めて、良心に関する諸説の抜粋を始めている。残念ながら、見出しの符号(G. 15)の内容が不明であるが、個別の抜粋は、「稿録」末尾部分主題2. 記号・著者・書名【B-Ms. 12b~Ms. 23b】のリスト(記号は不詳)

などを参照すれば、具体的に判る。この抜粋は Ms. の頁 a、b の空白なく連続して書寫されており、主題の一貫性が顕著にみられる。

再説を避けて、詳細は前掲の記述に譲るが、特に「稿録」の英文抜粋の間に散見される円了の日本語による書き込みは、英文に副った理解・要約が主であるが、Thomas Reid と Dugald Stewart の書き込みは直接孟子に言及おり、円了は孟子を意識しながらノートを取っていたことを物語っている。また、最終部分の Voltaire の個所に見られる「ロック」に関する書き込みはそのまま「排孟論」に採り入れられているし、Murphy の「習慣」、「観念連合」の説は「社会進化論」と共に孟子批判の理論的基軸であって、円了は既にほぼ完成していた「排孟論」の構成を想起しながらこの抜粋書寫を進めている。

3-2. 『倫理通論』(選集11巻 明治20年2月初版)

「序言：余、近ごろ世間の需に応じてこの書を編述するも、たまたま病床にありて、数書を検索するの便を得ず。ただ余がかつて集録せる倫理学の手記中より前後抜抄し、かたわら余が一己の意見を付するものに過ぎず。……明治19年2月」(選集11、p. 17)。この序言中の「かつて集録せる倫理学の手記」の一つは明らかに「稿録」の Bain : 'Moral Science, A Compendium of Ethics' からの抜粋である。本書は 'Moral Science' と著作目的が一致するものである。西洋の近代哲学思想の研究に重点を置いていた円了は、下記に挙げるようにホッブスからスペンサーの倫理思想を120章~141章の各章に於いて論じているが、その殆んどが「稿録」に抜粋している 'Moral Science' pp. 129-332 に説かれる哲学者である。相違しているのは、Mollaston (William Mollaston 1659-1724) (著書 'The Religion of Nature Delineated)、Ferrier, Mansel, Bailey を本書では除き、新たにフイヒテ (132章)、シェリングとヘーゲル (133章) のドイツ哲学者とコント (138章) を加えている。各章の順序は「稿録」の哲学者の順序と同

じであり、カント（131章）がBrown（130章 Reid中）の後に置かれている点が異なっているに過ぎない。

第8編 各家異説 第2 《近代》

第120章 ホブズ（Hobbes, Thomas）氏の説：

氏は政治上道徳を論じ、国家の法律をもって善悪を判定する規則とし、その目的とするところ自利自愛にありという。……氏の説常に自利自愛をもととし、道徳の良心はみな自利の心より発し、他人を愛憐し自身を軽賤するがごときも、その実、自愛の私情に外ならずという。……道徳と政治を混同している。君主をもって道徳の標準とする。自愛教 p. 113
【p. 265 : Ms. 28b-29a】：「He says : Pity is grief for the calamity of another, arising from the imagination of the like calamity befalling one's self ; [後略] 惻隱の心は自分の身の上に均しき害のおこることを想像することより生ず [中略] According to him, in the natural condition Self-interest, of course, is the Standard. He says, “disinterested Sentiment is in origin, self-regarding, such as pity.” 「ホブズ」は専ら自愛説を主唱するを以て、他愛は其本源、自愛より起ると云う」

第121章 カンバーランド（Cumberland, Richard）氏の説：

道徳の標準は人民一般の幸福を進捗するにほかならず。……一般の幸福を進捗するをもって道徳の規則と定む。……人の道徳心はすべて道徳力より生じ、良心も道徳力に外ならずという。……幸福主義。自身の幸福を減殺して他人の幸福を増進するを義とするものにあらず。すなわち自身の幸福を全うするをもって目的とするものにして、その他人一般の幸福を進捗するがごときは、自身の幸福を全うするに必要なるによるのみ。道理教 p. 114

【p. 265 : Ms. 29b】：「[前略] The Faculty (moral) is the Reason./Conscience is only Reason, or the knowing faculty in general, as specially concerned

about actions in their effect upon happiness ; [後略]

第122章 カワース氏およびクラーク氏の説

コッドウォルス (?カドワース) : カドワース (Cudworth, Ralf) :

善悪正邪は天然の規則によるものにして、決して人の意志をもってその標準と定むべき理なしという。なんとなれば、事物はすべて天然によりて生じ、人為によりて生ずるものにあらざればなり。……氏の道德心の原因は智力なりとす。……氏は幸福の人生の目的たることを説かず。ならびに道德の天帝に属せざるを唱う p. 114~5

[p. 265 : Ms. 29b] : According to him things are what they are not by Will, but by nature.

クラーク (Clark, Samuel) : 人の行為のよくその一定の規則に従って事物の関係に適合するをもって道德の目的とす。故に善悪の標準は適合に外ならず。……しかして道德の本心を論じて、すべて人の智力より生ずるものにして、苦楽の情感によりて生ずるものにあらずとする p. 115

[p. 265 : Ms. 30a] : The standard is a certain Fitness of action between persons.

第123章 ロック (Lock, John) 氏の説 :

経験論を唱え、道德は経験より生ずという。善悪は苦楽に外ならず、最上の快樂これを幸福とし、最大の苦痛これを禍害とする。この苦楽より生じた道德の本心は、三種の規律—天帝の訓令及び未来の賞罰、国家の法律及びその刑罰、世間の世論名譽—により次第に発達する。天賦論を排し、道德心はこの苦楽の情と天帝、政府、世論の三種の規則、および教育風習によって生じる。人生の目的は苦を避け樂を得るに外ならず。
p. 115

[p. 264 : Ms. 30a] : His human object is stated generally as the procuring of Pleasure and the avoiding of pain.

第124章 バトラー (Butler, Bishop Joseph) 氏の説 :

天賦論を唱える。ロックに反対。本来良心は存するとする。善悪の標準は良心に外ならない。氏の心理説は、自愛と他愛の情と、嗜好の情と、良心の三種の内、良心を優等の道德心とする。良心の命令に従って仁慈の行為を施すのが人の務めであり、幸福を求めることはひとの直接の目的ではなく、仁徳を求めることが目的であるとする。 p. 116

【p. 264 : Ms. 30b-31a】 : His standard of Right and Wrong is the subjective Faculty called by him Reflection or Conscience. ……

His psychological scheme is the three-fold division of mind already brought out ; Conscience being one division, and a distinct and primitive element of our constitution.

……

With regard to the theory of Happiness, he holds that men can not be happy by the pursuit of mere self ; but must give way to their benevolent impulses as well, all under the guidance of conscience. ……

第125章 ハチソン (Hutchson, Francis) 氏の説 :

バトラーと説は異なるが、一種の道德心をもって善悪の標準とする点は同じ。

氏は情を動静の二種とし、更にこの二種各々を自愛と他愛の二種とする。静性の情は人を愛する無私の公情であり、動性の情は自身の満足を目的とするもの。公情を高等とし、私情を下等とする。高等の公情は人々固有の本心であり、私情は外界に接して生じる感情とする。また、人生の目的は愛憐の情を第一とする。 p. 116

【p. 264 : Ms. 32a】 : …… He places the pleasure of sympathy and moral goodness in the highest rank, the passive sensations in the lowest. 是他愛

を本として、自愛をすつるなり

第126章 マンドヴィル (Mandeville, Bernard) 氏の説 :

人の本性は自利の私情があるのみ。道德の善心はもとより存在しない。

道德心が起るのは、識者の工夫による。つまり、人が私情は害があり、公情は益がある事を知り、道德心を起させるようにするからだ。従って、高慢心を道德心の起源とする。人が道德を愛し、善行を欲するのは虚名を好む高慢心によるのであって、道德者が人に道德を勧めるのもこの公情があるからだ。 p. 116～117

【p. 264 : Ms. 32a-b】 : Morality is not natural to man ; it is the invention of wise men who have endeavoured to infuse the belief, that it is best for everybody to prefer the public interest to their own.

道德なるもの本性にあらず、学者が工夫して、外より躦するものなり
……

Pride is of great consequence in Mandeville's system. The moral virtues are the political offspring which flattery begot upon pride.

第127章 ヒューム (Hume, David) 氏の説 :

善悪の標準は功利すなわち人間一般の幸福である。道德の本心は道理と人情の両心が相合して生じる。人には仁慈博愛の心があるが、純然たる無私の心があるとは主張していない。人の道德心は他人を愛する人情と、自身を愛する私心とが相合して生まれるとする。従って、この二心がある故、人は自他兼全の幸福を目的とする。

【p. 263 : Ms. 33a-b】 : The standard of Right and Wrong is Utility, or reference to the Happiness of Mankind. ……

As to the nature of the moral Faculty, he contends that it is a compound of Reason, and Humane or Generous Sentiment.
……

He contends strongly for the existence Disinterested sentiment or Benevolence ; but scarcely recognizes it as leading to absolute and uncompensated self-sacrifice.

The inducements to virtue are, in his view, our human sentiments, on the

one hand, and our self-love, or prudence, on the other ; the two classes of motives conspiring to promote both our own good and the good of Mankind.

第128章 プライス (Price, Richard) 氏の説 :

道理を道徳の本心とする。道理すなわち理解力を善悪の標準とし、行為が適応して、事情に合同する時は善行、適応合同しない時は悪行となる。この適応を観察知定するのは道理力によるのである。故に、道理力が諸善行の基本であり、道徳の本心もこの力に外ならない。また、人には無私の公情が存在するとし、自利論者の説を論駁して、仁慈博愛の心は教育風習にとってのみ生まれるものではないという。しかし、人生の目的は人間一般の幸福にありとする。

【p. 263 : Ms. 33b-34a】 : As regards the Moral Standard, he asserts that a perception of the Reason or the understanding, — a sense of fitness or congruity between actions and the agents and all circumstances attending them, — is what determines Right and Wrong. ……

The nature of the Moral Faculty, in Price's theory, is not a separate question but the same question with the Standard.

As regard to the psychology of Disinterested Action, he provides nothing but a repetition of Butler.

Happiness is the end and the only end.

第129章 アダム・スミス (Smith, Adam) 氏の説 :

同情を道徳の本心とする。善悪の標準は局外者の判断によって定めるべきである。人はみな己に憐するという弊があり、自身の説によって善悪を判定することは困難であるから、自身の行為の善悪を知ろうすれば、他人の立場に立って批評し、その行為を判断すべきである。この場合、「己を推して他に及ぼすの情」がなければならない。故に、同情すなわち同憐の情を道徳の本心とする。同憐の情は仁慈博愛の本心であり、この情が発達した者は上等の道徳者であり、発達していない者は下

等の道德者である。

[p. 263 : Ms. 34b] : The Ethical Standard is the judgment of impartial spectator or critic ; and our own judgments are derived by reference to what this spectator would approve or disapprove.

In the Psychology of Ethics, Smith would consider the moral faculty as identical with the power of sympathy, which he treats as the foundation of Benevolence. A man is a moral being in proportion as he can enter into, and realize, the feeling, sentiments, and opinions of the others.

……

第130章 リード (Reid, Thomas) 氏の説 :

道德の基本は理解力ではなく、天賦の道念である。智力は外界を知覚判定するもので、内界の道德を知定するのは道德の本心が初めから心内に存在するからである。これを良心という。良心は一部天賦で、一部は教育経験により次第に発達したものであるが、どの部分が天賦であって得有のものかは判定し難い。

[p. 262 : Ms. 35b-36a] : By an original power of the mind, which we call conscience or the moral faculty, we have the conceptions of right and wrong in human conduct, of merit or demerit, of duty and moral obligation, and our other moral conceptions ; and by the same faculty, we perceive some things in human conduct to be right, and others to be wrong. ……

Conscience は孟子の良心に似たり

Regarding Conscience, Reid remarks, 1 st that like all other powers it comes to maturity by insensible degrees, and may be a subject of culture or education. He takes no note of difficulty of determining what is primitive and what is aquired.

良心には、本来有するものと、教育によりて生ずるものありとす、これ孟子と異なる所なり。

……

ステュアート (Steward, Dugald) : 道徳の標準基址は内界にあって、人は生まれながらにこれを持っている。リード説と同じ。

[p. 262 : Ms. 36b] : The Standard is internal or intuitive — the judgments of a Faculty, called the Moral faculty.

「ステュアート」は、「リード」の如く、人に本来、固有の良心ある事を説く故に子も又孟子の派なり

ブラウン (Brown, Thomas) :

本然の道念を立てる。

[p. 261 : Ms. 36b] : As regard the Standard, Brown contends for an Innate Sentiment or moral sense.

氏も本来の性を説くものとす

第131章 カント (Kant, Immanuel) 氏の説 :

一種の道理学派。道理を道徳の規準とする。その哲学は心理学より起り、心理には智力、意志、感情の三種がある故、哲学も三種に分れる。意志に属する哲学は実用の道理を論じるもので、道徳、政治学はこれに属す。道徳の原理を原形と実質との二種に分け、実質は外界の経験より生まれ、原形は心内に存在する純理より生じる。純理は「普通必要」の性質を具えているから経験の結果ではない。これが意志の原理であり、道徳の基本である。この原理を論定するに際して、意志の自由、聖霊の不死、天帝の現在を立てる。人生の目的は、徳が目的であって、幸福は目的ではない。しかし、人の目的は幸福を離れていない。徳と幸福とが契合して人生の目的となるのは、人の力でもなく、経験の結果でもなく、天帝のなすところである。

[p. 258 : Ms. 45a] : ……

According to him the moral faculty is reason. The apprehension of what is morally right is entirely an affair of Reason.

……

ヤコービ (Jacobi, Friedrich Heinrich (1743-1819)) :

カントとの違いは、道理に代えて情操を道徳の基本とする。

[David Hume über den Glauben, oder Idealismus und Realismus, 1786 ; Brief an Fichte, 1799 ; Von der gottlichten Dingen, 1811. ドイツにおける「信仰哲学」の組織者。理性に対する感情の優位を認め、信仰哲学を唱道完成した。カント (及びラインホルト) の哲学に対する最初の組織的反対者。理性的認識の外に直接的に知る心の智慧を求め直接的認識として信仰を立てた。岩哲辞]

第132章 フィヒテ (Fichte, Immanuel Hermann 1797~1879) 氏の説 :

道徳の原理は良心に随順するにあり。良心に随順するには、目前の世界の現存を信じるだけではなく、精霊世界の現存をも信じる必要がある。道徳上天帝を立てるが、その天帝は、一般とは異なり、ただ道徳の本源とするに過ぎない。幸福を人の目的とはせず、徳を修めることを最上の善とする。

第133章 シェリング氏およびヘーゲル氏の説 :

シェリング (Schelling, Friedrich Wilhelm Joseph von 1775~1854)

道徳の基本は天帝を信じることである。天帝が現存するから世界が現存する。道徳は、我々の精神が中心である天帝に帰向することによって生じる。この帰向あるものが徳である。徳と幸福は同一であって、完全な徳を幸福とする。

ヘーゲル (Hegel, Georg Wilhelm Friedrich 1770~1831) の説 :

氏の哲学は三断より成る。従って、倫理説もこの三断の論法による。その論は、第一は純理の道徳、第二は一個人の道徳、第三は社会の道徳に分かれる。心性作用中意志を道徳の起点とし、善は純理上の道徳が進んで行為上これを実践するに至ったもので、これに反するものは悪である。

第134章 ペーリー (Paley, William) 氏の説：

道徳の標準は神意および功利すなわち幸福にあり。天賦の道徳心を認めず、幸福を目的とする点は功利主義者の説と近い。人に本来無私の公情が存在することを説かないが、天意を立てる故、人に仁心が在るのは天帝の命によるとする。氏の説は功利説と天帝説との相合より成る。

【p. 261 : Ms. 37a】 : The Ethical Standard with him is the reference to the Will of the Deity and Utility, or human happiness. He does not discuss Disinterested Sentiment ; by implication, he denies it.

第135章 ベンサム (Bentham, Jeremy) 氏の説：現今行なわれている功利説の創始者。道徳の基址標準は幸福を進捗こと。ヒューム、ペーリーと原理的には同説。この原理を道徳法律一般の目的と定め、論理を構築した。道徳、法律は帰するところ苦楽の両情に基づく。道徳心を自愛心と他愛心の二種に分けるが、実際は苦痛と快樂の両情であって、純然たる無私の道徳心を云っているのではない。無私の愛情は連想すなわち思想の連合により生じる。幸福とは無苦有楽のことで、最大苦を除き最大楽をもとめること。従って、最大の幸福を最多数の人に与えることが人生の目的である。最大幸福説。ペリーと違って神意を取らない。

【p. 261 : Ms. 37b-38b】 : Utility serves in his judgment for Ethics or Morals. Nature has placed Mankind under the governance of two sovereign masters, Pain and Pleasure. ……

There are four sanctions or sources of Pain and Pleasure, by which men are stimulated to act right — physical, political, moral and religions.

……

The Standard or End of Morality is the Production of Happiness or Utility. Bentham is thus at one his first principle with Hume and with Paley ; his peculiarity is to make it fruitful in numerous applications both to legislation and to morals.

……

The disinterested sentiment is not regarded by Bentham as arising from any disposition to pure self-sacrifice. He recognizes Pleasures of Benevolence and Pains of Benevolence ; thus constituting a purely interested motive for doing good to others.

第136章 マッキントッシュ (Mackintosh, SirJames) 氏の説：

功利説を取り、人生の目的は幸福外ならずとする。ベンサムは功利説とは相違する。幸福は人の本心ではなく、諸善行の標準とする。良心は本来存在するものではなく、経験連想より発達したもので、その発達の際に無私博愛の情が生まれるが、これが生じていない時は自利の私心があるのみ。従って、彼の幸福論にあつては、自愛と他愛の両説を合して道徳の目的とする。

【pp. 261-260 : Ms. 39a】 : On the Standard, he pronounces for Utility, with certain modifications and explanations. ……

In the Psychology of Ethics, he regards the Conscience as a derived or generated faculty, the result of a series of association.

人の良心は、思想の連絡によりて生ずるものとす

He makes Disinterested Sentiment a secondary or derived feeling — a stage on the road to conscience.

第137章 クーザン (Cousin, Vitor) 氏の説：

功利説を反駁する。道徳は感覚上の経験より生じるものではなく、徳義は自利の情より生じるものではない。仁愛愛憐等の情を道徳の基礎とする説に反対して、情感は時々変わり永続しない故、道徳の原理になりえないという。道徳の原理は道理に外ならず、我々の諸行為は道理によってその善悪が判定される。こうして、この善悪の判定により道理の規律が生まれる。

【p. 258 : Ms. 45b】 : The standard is the judgment of good or evil in actions.

He holds that good and evil are qualities of actions independent of our judgment, and having a sort of objective existence.

ジュフロワ (Jouffroy, Theodore Simon 1796~1842) :

クーザンの門弟。クーザンと多少見解を異にする。純善を道徳の基址とし、道理を道徳の本心とし、幸福を人生の目的とする。

【p. 258 : Ms. 46b】 : The Standard is the idea of Absolute Good or Universal order in the sense explained by the author. ……

The moral faculty is Reason. ……

第138章 コント (Comte, Isidor Auguste Marie Francois 1798~1857) 氏の説
フランス実験哲学の祖。形而下のみで、形而上の空論を論じない。倫理学を社会学の一部分とする。人の行為の規則は一個人では知ることができず、社会によって知ることができる。人が相愛し相親しむのは、一個人の経験論究より生じるのではなく、社会の人情中に本々この親愛の情が存在する。この情に基づき道徳を立てる。

第139章 ヒューエル (Whewell, William) 氏の説 :

常識をもって道徳をたてる。常人の普通の知識に基づき善悪を定める。
常人は善悪を判定する時、徳に基づく説と楽に基づく説のいずれかを取るが、氏はこの両説を結合折衷しようと務めている。人生の目的を論じる場合も幸福と徳との二者を取る。道徳の本心論は、行為の原因を嗜好、愛欲、安全を欲する情と道徳を判ずる心等より生じるものに分ける。

【p. 260 : Ms. 41a】 : Morality has its root in the common nature of Man ; a scheme of Morality must conform to the Common Sense of Mankind, in so far as that is consistent with itself.

Happiness is not a sufficient end itself ; morality is also in the end itself.
Human happiness is not to be conceived or admitted, except as containing a moral element.

第140章 ミル氏の説

ベンサム説を継ぐ功利説。道德の標準は幸福である。幸福を進める行為は善で過患を生じる行為は悪である。幸福とは快樂が在って苦痛が無いこと。この快樂と苦痛は人の感情である。善悪は全く単純の感情より生じ、道德の本心とする天賦の良心も同じ。愛他の公情は自愛の私情より生まれる。単純の感情が次第に発達して複雑の道德心を生じるのは、連想の規則が在るからだ。「連想」とは「思想連合の規則」であって、感覚上経験したものが心内に再現して思想を生じ、諸思想が互いに連合して複雑の思想を生じる。

【p. 260 : Ms. 39b】 : ミル (Mill, James 1783~1836) :

He endeavours to show in his Analysis of the Human Mind that the moral feelings are a complex product or growth, of which the ultimate constituents are our pleasurable and painful sensations.

By the union of two stream of association the idea of our beneficent acts becomes a pleasurable idea ; that is, an affection, and, being connected with actions of ours, is also a Motive. ……

【p. 259 : Ms. 42b】 : Mill, John Stuart :

His Ethical Standard is the principle of Utility. We have seen his psychological explanation of the Moral Faculty, as a growth from certain elementary feelings of the mind. ……

第141章 スペンサー (Spencer, Herbert) 氏の説 :

進化説によって道德を論じる。人生の目的は幸福にありとするが、進化の原理を応用する点で功利論者と異なる。道德は目的ある挙動より生じ、目的ある挙動は目的なき挙動より生じる。人類の道德上の行為は下等動物の目的なき挙動より発達したものである。目的なき挙動が目的ある挙動になり、この挙動が目的に適合する時、生存を全うし、その逆は生存を害する。生存を助ける行為は善行となり、生存を害する行為は悪

行となる。ここに、行為の善悪が起る。換言すれば、善悪は苦楽より起る。つまり苦は生存に害となり、楽は生存の益となるからだ。道德の本心については、その一半は経験により、その一半は生来有する本能力であるとす。この能力は父祖数世間の経験より生じる。従って、経験論者の説と天賦論者の説を取捨折衷しているようである。道德の目的を論じる場合、自愛も他愛も一儻論であることを知り二者の中庸を取るべき理由を論じている。

【pp. 259-258 : Ms. 43a】 : His ethical Doctrines form part of the more general doctrine of Evolution. He says ; “My dissent from the doctrine of Utility, as commonly understood, concerns not the object to be reached by men, but the method of reaching it. While I admit that happiness is the ultimate end to be contemplated, I do not admit that it should be proximate end. ……”

3-3. 『哲学要領』

雑誌掲載（『井上円了関係文献・年表』東洋大学 1987による）

「明治17年（『令知会雑誌』1, 6, 7, 8, 9 ; 4.29~12.21）

「明治18年（この年7月10日東京大学卒業）（『令知会雑誌』10, 11, 12, 14, 19, 20 ; 1.21, 2.21, 3.21, 5.21, 10.21, 11.21, 「教学論集」18~20, 22~24 ; 6.5, 7.5, 8.5, 10.5, 11.5, 12.5）（;の前は雑誌の号数、後は刊行の月日）

明治19年（『教学論集』25, 26(?), 28, 30, 32, 34, 35, 36 ; 1.5, 2.-, 4.5, 6.5, 8.5, 10.5, 11.5, 12.5。（『令知会雑誌』26 ; 5.21）「教学論集」37 ; 明治20.1.5。

出版

『前同 前編』（19.9.- ; 令知会）四聖堂蔵版

『前編 後編』(20.4) 哲学書院 四聖堂蔵版：

三浦節夫氏の調査によれば、「雑誌掲載」の「教学論集」37(明治20.1.5)の内容は『哲学要領 前編』である。『同 後編』は、現在のところ、「雑誌掲載」は不明である。したがって時期は不詳であるが、『同 後編』は「書下し」の可能性が大きい。

前編の序言(明治19年6月)で円了は井上哲次郎の『哲学講義』はギリシャ哲学の略述に終り「西洋近世哲学および東洋哲学に論及せず」と批評して、本書は「古今東西の哲学を列叙対照し、読者をしてたやすく哲学全系の大綱要領を知らしむ」ものであると述べ、その特色としている。また、後編の序言(明治20年4月)では、前編は「哲学の小史とも名付くべきものにして、歴史上諸家の説を列叙対照せしもの」である。これでは哲学の「外部の関係」は理解できても、哲学の「内部の組織」を理解することは出来ないと述べ、したがって後編は「論理発達の規則に基づきて、哲理を初門より次第に進みてその蘊奥に及ぼし、もっぱら純正哲学内部の組織を論述したるものなり」と、その目的を明言している。

円了が序言で述べていた通り、「前編」は哲学史であり、東西の古代哲学の記述は多い。この記述と「稿録」との関連は、例えば、「稿録」の巻頭部分では Handbook of the History/of Philosophy by Schwegler [pp. 255-227 : Ms. 52b~Ms. 112a] (岩波文庫上巻 第一章~第十六章・七「アリストテレス以後の哲学への移り行き」まで)、《A history of philosophy in epitome by Albert Schwegler ; translated from the first edition of the original German by Julius H. Seelye ; revised from the ninth German edition, with an appendix, by Benjamin E. Smith. — [Rev. ed.]. — New York : Appleton,》末尾部分では An Epitome of the History of Philosophy [B-Ms. 34a~Ms. 38b] 《Henry, C. S. An epitome of the history of

philosophy ; being the work adopted by the University of France for instruction in the colleges and high schools. Translated from the French, with additions, and a continuation of the history from the time of Reid to the present day, Vol. 1-2. — New York Harper-1869 2 vols. This is a two-volume survey of the history of philosophy from the Indian Vedas to Thomas Reid.》の抜粋が考えられる。両書は共に早くから我国で読まれ、前者は「農学校文庫」に、後者は「内村鑑三文庫」や「新渡戸文庫」に見られる。その他、「稿録」での抜粋は多くなく、また、「前編」では直接関係はみられないが、円了自身所蔵していた Ueberweg, Fridrich : History of the philosophy from Thales to the present time. Translated from the 4th German ed. by Noah Porter. New York, Charles Scribner's, 1887は、円了がギリシア哲学の始祖を「タレス」とする点から看過することの出来ない哲学史である。この書は「漱石文庫」（東北大学図書館）に見られる。

筆者の恣意的な引用によって、『哲学要領』と「稿録」との対応関係を論述することは、検証の客観性を失う惧れがある故、理解し難いと思うが、対応関係のみを指摘するに止めた。詳細な点は現時点で唯一公表されている喜多川論文を参照されたい。

前編

第1段 緒論

第1節 義解：

第2節 範囲：

第3節 目的：

【pp. 221-220 : Ms. 125a-126b】

(t) History of Philosophy by Ueberweg 【Ms. 125a-b】

「哲学と理学の別」

Philosophy is the science of principles. It is not occupied with any special limited province of things nor with the sim of these provinces taken in their full extent, but with nature, laws and connection of whatever actually is.

「プラトン」及「アリストテレス」は哲学を義するに広狭の二様あり、
広義にては、諸理学を合するなり

「ストイック」は、哲学は物理、倫理、論理に分け Epikouros 道理上、
幸福を求むべし etc.

Wolf は哲学と positive science の区域を定めたり。

Kant 学理上の諸学の統率とし、諸学と人理の目的との関係を論ずる学
とす

(v) George Henry Lewes, History of Philosophy 【Ms. 126b】

「理学・哲学」

Science is defined as :

The systematization of our knowledge of order of phenomena
considered as phenomena.

Philosophy is the systematization of the conceptions furnished by science.
Each distinct science embraces a distinct province of knowledge. But
philosophy has no distinct province of knowledge. It embraces the whole
world of thought.

(波) Ferrier's system of philosophy/metaphysic 【Ms. 130b】

氏は哲学を形而上学と同一となして、其目的は心理を論究…… [不明]
……道理上に心理を……[不明]……

(仁) Caird's philosophy of Kant 【p. 218 : Ms. 131a】

リュース氏のコント氏性学説には、哲学には

哲学は The explanation of phenomena of the universe. 又曰く Philosophy is
inherent in man's nature.

(保) Principle of Science by Jevon 【Ms. 131b】 「前出；後編 第39節」

理学の基礎

理学は identity & diversity, discovery

より起る 其規則は即ち

law of Identity/law of Contradiction/law of Duality excluded middle

理学の起るには

Power of discrimination/Power of detecting identity/Power of retention

Fiske's Outline of Cosmic Philosophy 【p. 219 : Ms. 132a】

理学の義解

氏の説にては、理は宇宙現象の一二の部分に属する真理を研究するものにして全体に亘る真理を研究するにあらずと

Knowledge of science is only an aggregate of parts, not an organic whole. But the universe of phenomena is an organic whole. 之を確認するものを哲学とするの説なり

While science studies the parts, philosophy studies the world.

Dynamic Sociology by Ward 【p. 217 : Ms. 133a】

The real object of science is to benefit man. If science which fails to do this, however appreciable, its study is lifeless.

辺 : Energy 【p. 217 : Ms. 133b】

「力の論」

……

The object of all science is truth and that of philosophy also matter and its relation (the most important one is motion) that is change in space and time.

智 : Whewell's History of Inductive Science 【p. 217 : Ms. 134a】

理学の基礎

To the formation of science, two things are requisite : facts & ideas/sense and reason.

That is observation of things without & inward effort of thought.

理学を□して心理に入るべし

第3段シナ哲学

第13節 孔老

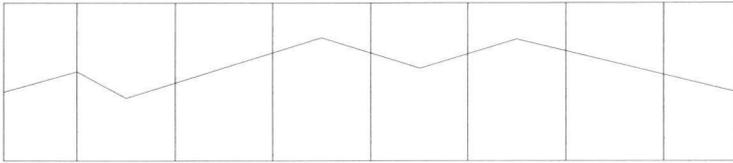
第14節 盛衰

〔稿録〕の末尾部分は多くを中国思想史の抜粋に費やしている。まず Development of Chinese Philosophy 【pp. 202-201 : B-Ms. 26a~】に始まり、間に、Henry, C. S. An Epitome of the History of Philosophy の15頁~110頁からの抜粋 [V.I (p. 22) 印度希臘両哲学の起源に関しての疑問 【p. 199 : Ms. 34b】、V.I (p. 51) 印度希臘両哲学の起源に関しての疑問 【p. 199 : B-Ms. 35b】、V.I (p. 58) 印度哲学と西洋哲学の比較 【p. 199 : B-Ms. 36a】、V.I (p. 89) 埃及文明の起源 【p. 199 : B-Ms. 36b】、V.I (p. 98) 希臘学の起源 【p. 198 : B-Ms. 37b】]などを挟み、再び中国思想史に関する長い抜粋が続く 【pp. 198-191 : B-Ms. 39a-B-Ms. 57b】 (B-Ms. 56ab, Ms. 58bは中国歴代王朝の期間の計算に関する雑記)。この中国思想史に関する抜粋の内容は実に詳細であって、中国の時代と思想・哲学の盛衰の編年的記述であるが、「第3段シナ哲学」の記述と直接対応していない。しかし、円了が丹念に抜粋し、検討し、「シナ哲学」に対する知識を豊かにしてシナ哲学史観を確立して行く様子が窺える。参考の為に一例を挙げよう。

【p. 191 : B-Ms. 55b-56a-b】

Let me draw a diagram. In the following diagram the line A-B represents the length of time which extends from the beginning of the Chu-dynasty to the present dynasty.

A 周 秦 漢 隋 唐 五代 宋 元 明 清 B



[円了の試算] 【B-Ms. 56b】

周 = 873、秦 = 40、漢 = 426、隋 = 453、唐 = 389 ?、五代 = 100、宋 = 320、元 = 89、明 = 276

(B-Ms. 58b)

周 = 877、秦 = 40、漢 = 425、晋隋 = 407、唐 = 280、五代 = 47、宋 = 252、元 = 111、明 = 292、清 = 225

【p. 191 : B-Ms. 57a】

We have also seen that in ascending line there was a constant struggle between many elements and that in the descending line there was a harmony so that the former is the cause of development and the latter is the cause of decaying. Now it will be right to conclude that philosophy is a living organism.

第4段インド哲学

第19節 釈迦教：[前出] p. 104

【p. 199 : B-Ms. 36a】《内容は一致しないが、主旨は同じ》

…… The spiritualism of the first school resembles that of Berkely ; the principles of the second coincide in many points with materialism and sensualism of Cabanis ; the individual pantheism of the third has been reproduced in Germany by Fichte.

第6段ギリシャ哲学第1 総論

第23節 起源：……ただここに論究すべきは、その元素本来、ギリシア人の思想中より発生せしや、また東洋より漸入したるやの一点にあり。旧史について案ずるに、その元素、多少他邦より入りきたりしや疑いなし。けだしオルフェース氏はスレースよりきたり、フェロニユース氏はエジプトよりきたり、カドモス氏はフェニキアよりきたり、始めてギリシア文明の基を開くという。p. 109

【p. 198 : B-Ms. 37b】

希臘学の起源

(page 98) Greek Philosophy

Greek civilization had its origin in the East, from whence it spread into Greece by three different channels, at the north, the south, and the east. Three names appear prominent in the origin of this civilization : Orpheus, from Thrace, Pheroneus, from Egypt, and Cadmus, from phenicia.

第24節 発達：……ピュタゴラス氏はエジプトおよびバビロンに遊び、また遠くインドに至りその文化を実視して帰りて、また一派の哲学を開くという。p. 111

【p. 198 : B-Ms. 37b】

(page 106) Antiquity speaks of his (Pythagoras) travels in Egypt and Babylonia ; and according to the common opinion, he penetrated also as far as India.

第7段ギリシャ哲学第2 組織 《以下、「稿録」は A history of philosophy in epitome by Albert Schweigler による故、記述を省略し、参考として、シュヴェーグラー『西洋哲学史 上巻』岩波文庫 昭和34年9月（第29刷）の対応する章節名の和訳を挙げる。》

第26節 イオニア学派

【p. 255~】 1. Pre-Socratic Philosophy ; 第三章 ソクラテス以前の哲学の概観

【p. 254】 a. The Earlier Ionic Philosophers；第四章 前期イオニア哲学者たち

第27節 イタリア学派 ピュタゴラス；

【p. 254～】 b. The Pythagoreans；第五章 ピュタゴラス学派
書き込み **【p. 253】**

第28節 エレア学派 クセノパネス、パルメニデス、ゼノン

【p. 253～】 c. The Eleatics；第6章 エレア学派
書き込み **【p. 252】**

第29節 詭弁学派

【p. 252～】 d. Heraclitus；第七章 ヘラクレイトス
書き込み **【p. 251】**

【p. 251～】 e. Empedocles；第八章 エンペドクレス
書き込み **【p. 250】**

書き込み **【p. 249】**

【p. 249～】 h. The Sophists；第十一章 ソフィストの哲学
書き込み **【p. 247】**

第30節 ソクラテス学派

【p. 246～】 2. The Second Period of Ancient Philosopher
Socrates；第十二章 ソクラテス
書き込み **【p. 244】**

The Incomplete Socrates；第十三章 小ソクラテス学派
書き込み **【pp. 242-241】**

第31節 プラトン学派

【p. 241～】 (c) Plato；第十四章 プラトン 三 プラトンの体系の区分、四 プラトンの弁証法 五 プラトンの自然哲学 六 プラトンの倫理学 七 回顧

書き込み **【pp. 237-236】**

第32節 アリストテレス学派

【p. 236～】；(e) Aristotele : 第十六章 アリストテレス 一、生涯と著作 二、アリストテレス哲学の一般的性格と区分 三、倫理学と形而上学 四、自然哲学 五、倫理学 六、ペリパトス学派 七、アリストテレス以後の哲学への移り行き

書き込み 【p. 234】

書き込み 【p. 230】

書き込み 【p. 231】

書き込み 【p. 228】

書き込み 【p. 227】

第33節 ストア学派 《岩文：第17章 ストア派 参照》

【p. 228】；岩波文庫 p. 214

第34節 エピクロス学派 《岩文：第18章 エピクロス派 参照》

【p. 227】；岩波文庫 p. 214

第35節 懐疑学派 《岩文：第18章 エピクロス派 参照》

【p. 227】；岩波文庫 p. 214《岩文：第19章 懐疑論と新アカデメイア参照》

近世哲学第一 総論

第40節 学派

【p. 223 : Ms. 120b～121a】

(i) 「初に入るべし」

Descartes, Locke, Mallbranche, Leibnitz, Hume the philosophy of Locke is triumphant in Britain. Condillac held the same philosophy in France.

In Britain, Shaftesbury, Butler and Hutcheson maintained a moral philosophy based on a foundation against Locke's psychology.

其后 Hume 出でて懐疑を開き、つとに感覚を開く 斯く一方に僻へ心

理学を立つべからざるに至り「リード」氏人の普通の考に従って哲学を
とくに至る「カント」深思想を以て Hume に反して直觉教を開く

Kant (speculative) Reid (common sense)

経練家に反して起るもの其他

Stewart, Hamilton, Cousin

是皆、「リード」及「カント」氏の説を進展増補するものなり。「カ
ント」の派「フィフテ」「セーリング」「ヘーゲル」に伝わる「カント」
は自由意志を以て道義とす。善意の元(?) 来を論ず

後編 (「稿録」に挙げられる哲学者と著書のフルネームを [] に示した。)

第12節 活動原因：別して動物は、摂取するところの食物を変化して活
力を発散すること多きをもって、その活動ははなはだ著しきを見る。け
だし食物中に活力の潜伏するありて、これを発散するは化学的作用あ
るによる。

[p. 225 : Ms. 118b] (d) 「活力生む」

The physical basis of mind by Lewes (George Henry Lewes)

…… In the nourishment of every organism there is an accumulation of
molecular tension. That is to say, stored up energy in a latent state, ready
to be expended in the activity of that organism.

生力は外より摂取したる食物中に含む所の聚力の発して活力となるによ
る

第15節 心身関係：「……しかして有機体中の活動力は、無機物質の活
力と同一なるをもって、心力また物力の一種と定めざるべからず。ただ
その作用の妙を呈すると呈せざるとは、神経構造のいかんによるの
み」。

ブレイ：「ブレイ氏いわく、温力、光力、電力、生力、心力等は動勢の形情異なるによりて、我人その別を知るのみと」。

【p. 224 : Ms-119b】 「生力、・元、造化の処入る」 — 墨書

「心理と物理と同一の理法に入るべし」 (ペン字の書込み)

Heat, light, electricity, chemical affinity, life, mind are forced known to us only in their modes of motion which is shown by grove.

【Ms. 119a】 f Bray's Anthropology

「地球進化、……は帰元の例になる」

[Charles Bray (1811~1884) British philosopher and author.

A Manual of Anthropology or Science of Man, based upon Modern Research (1871)]

【p. 224 : Ms. 120a】 h Brayの説にては……

「非心非物」

ステュアート：「ステュアート氏いわく、心力大いに物力と異なるところあれど、その高低増減に物力に伴うをもつて、これを勢力保存の理法中に入るべしと」。

【p. 222 : Ms. 123a】 o Stewart's Conservation of energy

[Dissertations : On the History of Metaphysical and Ethical, and of Mathematical and Physical Science, 1835]

force 1. mechanical or molar/ 2. molecular (1. heat/ 2. light/ 3. chemical/ 4. electricity) 「力の種類」 《この総てに？印 (墨線) を付す》【Ms. 123a】
(o) 心力は大に物力と異なる所あるのも其高低増減毎に物力を伴ふを以て勢力保存の理法の中に入るべし云う 「心理・物理」

更に進みて心性と外貌との関係を考えるに、
ベーン：「ベーン氏もその心身論中に示すがごとく、思想情感は多少外
貌に発顕するを常とすおよそ人の喜怒哀悪のその言語また面貌にあらわ
るるは、みな人の知るところなり。また身体上の変化は心性上にその影
響を生じ、心性上の変化は身体上にその影響を生ずるも、また人の実験
するところなり」。

【pp. 221 : Ms-124b】 (r) Bain's Mind and Body 《?印を付す》

「智力進化」《墨書》

[Alexander Bain (June 11, 1818 — September 18, 1903) was a Scottish
philosopher and educationalist.

Mind and body. The theories of their relation. By Alexander Bain. 1874]

心身の関係論を論ぜり

第一に感応は言語又は外貌に顕はる

第二に心体上の変化は心性上其影響を生じ、心性上の変化は身体上に
其……飢餓労働睡眠症病等の心性に影響あるが如し。憂患恐懼等の健康
上に影響あるが如し。

s 脳と心の関係

1. a blow of the head which suspends conscious
2. increase of the product of nervous waste, mental exertion

《第一……から「脳と心の関係」の2.までは、?印を付す》

3. quality & quantity of food supplied to brain

「心身関係」

(a) ……

(b) ……

(c) ……

(d) ……

(e) …… 【Ms. 125a】

「蓋し人心思と外貌とは密切なる關係を有するを以て……」（『排孟』29号 p. 277下）『心理摘要』 p. 18）

知力は思想作用にして、これに反対するもの、これを反射作用と名づく。

スペンサー：「スペンサー氏かつてその心理学中にこれを論じて、思想作用は反射作用の複雑にわたり、経練の度数を減ずるより生ずという」。

リボー：「リボー氏もその遺伝論中に、知力と本能力は度量の異なるのみにて種類の異なるにあらずという」。— 【p. 220】《『排孟論 インステインクト』と同じ》

【p. 220 : Ms. 127a】 w Ribot's Heredity

「智力は性力・心理」

[THEODULE ARMAND RIBOT (1839-1903), French psychologist

His thesis for his doctor's degree, republished in 1882, Heredity]

モルフェー：「モルフェー氏はその知力論中に、習慣力は有知無知両作用の基礎なりという」。

【p. 218 : Ms-131a】 仁 : Murphy's Habit & Intelligence 【Ms. 131a】

「習慣論」《喜多川論文になし》

[Habit and Intelligence, in Their Connexion with the Laws of Matter and Force : A Series of Scientific Essays by Murphy, Joseph John (1827-1894)]

[A thoroughly Darwinist treatment, hence an incunabula of Darwinist psychology, published before Darwin himself had applied evolutionary theory to human mental development in The Descent of Man and The Expression of the Emotions.]

氏はHabitを以てUnconscious & conscious lifeの原理とし、又life of mindの原理とす。連想の理法も其一部なり

第16節 進化原理

ゲーテ、ラマルク：そもそも進化論は生物学の進歩によりて得るところの結果にして、ゲーテ氏、ラマルク氏ら、早くすでにその原理を知るといへども、」

ダーウィン：「ダーヴィン氏を待ちて始めてその実証を得たり、今その大意を述ぶるに、……」。

第17節 進化作用

第18節 進化諸例：まず宇宙の進化を考ふるに、太初宇宙間ただ渾然たる気体あるのみ。その体火気より成り、非常の高熱を有して、あたかも今日見るところの彗星の尾のごとしという。これをネビュラ説と称す。

けだし宇宙気体論はカント氏に起こり、

ネビュラ説はハーシェル氏に起こるといふ。

ネビュラ説 (nebular hypotheses) 【p. 216】 ハーシェル参照

カント、ハーシェル

【p. 216 : Ms. 134b-135a】 利 : Sir W. Herschel's nebula hypothesis is that
…… 「子ビュラ 《喜多川論文になし》」 「地質論」

[SIR W. Herschel (1738-1822), English astronomer.]

“Assuming a self-luminous substance of a highly attenuated nature to be distributed through the celestial region, ……”

リボー：「故にリボー氏は性力すなわち本能力は習慣の遺伝したるものなりという」。

【p. 220 : Ms. 127a】 w Ribot's Heredity 「智力は性力・心理」

[Theodule Armand Ribot (1839-1903), French psychologist.

His thesis for his doctor's degree, republished in 1882, Heredity]

ゴルトン：「ゴルトン氏もまた天才の全く遺伝に属するを論ぜり」。

【pp. 220-219 : Ms-127b】 x Galton's Hereditary genius

「「遺伝」 《喜多川論文になし》」

[Sir Francis Galton F.R.S. (February 16, 1822—January 17, 1911), half-cousin

of Charles Darwin, was an English Victorian polymath, anthropologist, eugenicist, tropical explorer, geographer, inventor, meteorologist, proto-geneticist, psychometrician, and statistician.

Francis Galton : Hereditary Genius , 1892]

氏はの Genius の（発育は）全く遺伝に属するを論ず。氏は斯くして「タレウキン」氏の論に会照せり。

スペンサー：「スペンサー氏かつて知覚作用の起るゆえんを論じて、その作用は神経構造の複雑より生ずという」。

第4段 非物非心論

第21節 端緒

ブレー：「万物の本源は一体の物質にして、その物質次第に進化して千態万状の形象を現ずるも、その未だ現ぜざるに当りては、その体一定の形象を有すべき理なきをもって、これを非物非心の体に帰せざるべからず。……故にブレー氏は、全世界は一個の完全なる有機体なりという」。

【pp. 224-223】 Bray 説にて物心は初めより共に存るべき元素ありて、其成長によりて分る故に曰く

The whole world is one, complete and living organism. The tendency on the part of matter to organize itself to grow into shape, to assume definite forms in obedience to the definite action of force is all-pervading. 又曰く Incipient life manifest itself throughout the whole of what we call inorganic nature.

之は非物非心に入るべし人動の別は度にありて類にあらず故に死は其死にあらず

第39節 唯心論拠

ヒューエル：「ヒューエル氏物理学の要素を論じて事実と想念の二種とし、事実を搜索するに感官を要し、想念をけいせいするに論理を要すと

いう。しかして感官も論理も共に思想に属するをもって、理学の基礎は全く心理に属するをしるべし」。

【p. 217 : Ms. 134a】 智 : Whewell's History of the Inductive Science
【Ms. 134a】 「理学の基礎」

[William Whewell (1794~1866) 【カントの認識論をイギリスに伝えた。直感主義的倫理学者、数学・物理学者としても有名。History of Inductive Sciences, 1837 ; Elements of Morality, 1840—岩哲辞】]

To the formation of science, two things are requisite : facts & ideas, sense and reason.

That is observation of things without, & inward effort of thought
理学を□して、心理に入るべし。

セボン (? Jevons : Principle of Science) : 「セボン氏の論ずるところによるに、理学の規則は均同と背反と無間との三法にして、理学の起るは弁別力と契合力と記住力との三力を要すという」。

【p. 218 : Ms-131b】 保 : Principle of Science by Jevons

「理学の基礎」 《喜多川論文になし》

[Jevons, William Stanley 1835-82, English economist and logician.

Principles of Science : A treatise on logic and scientific method , 1874.]

理学は Identity & diversity, discovery より起る、其規則は即ち
law of Identity,

law of Contradiction,

law of Duality excluded middle

理学の起るには

Power of discrimination,

Power of detecting identity,

Power of retention

第40節 意識範囲

第41節 唯心一理

デカルト：「近世の初期にあたりてデカルト氏疑念を起こして神物を排し、わが体を空じたととも、その極思想自体を疑うことあたわざるをもって、ついに意識を本として哲学の新礎を起すに至る」。

キルヒマン：「キルヒマン氏も、その無仮説哲学中にわが在るをもって哲学の起点とす」。

【p. 218 : Ms. 130a】 波 : Kirkman's Philosophy without assumption

[Thomas Penyngton Kirkman (1806~1895) Philosophy without assumption. (William Wallace 1844~1897, Review : Academy vol. 9, 1876)]

「唯心」

氏は我在 (I am) を以て哲学の起こるとす ・ 者我在は諸論諸説の之より出ればなり。

第42節 時空標準

カント：「カント氏は時空の心界にありて外物に属せざるゆえんを示さんと欲し、外界を組成せる時空両間の思想中に存するゆえんをろんじたるに」、

スペンサー：「スペンサー氏これを駁して時空の感覚より生ずるゆえんを証すといえども、」。

第51節 理想作用 「しかして物界も心界も、共に理想の体より開発したるをもって、物理心理の両学は、要するに理想の一学に帰せざるべからず」。

シェリング：「かくのごとく絶対の理体を相対の外に設けたるはシェリング氏の説にして、……」

エヴァレット：「エヴァレット氏曰く、理想は木石のごとき死物にあらざれば、自体に具するところの力をもって発育することを得といい、ま

た自らその形を外に現ずるは、理想自体の性質なりという」。

[p. 218 : Ms. 129b] 呂 : Science of thought by Everett

「思想進化」《喜多川論文になし》

[Charles Carroll Everett (1829-1900), American divine and Philosopher
The Science of Thought (Boston, 1869 ; revised 1891).]

氏曰く思想は [不明]/生活は理を以て [不明] それ自体の力を以て発生す。思想は木石の如き品物にあらざれば、自体に具する所の力を以て発育することを得と云い、又自ら其力を外に現ずるは理想自体の性質なり。/氏曰く外物はすべて其形を思想の上に現ずるにあらざれば我人之を知る能わず。/又曰く外界は [不明]

《「生活は……発生す」を線で消す》

シェリングの説はシナの太極分化説に類す。

繫辭伝：

楊氏『太玄経』：

第10段 物心同体論第1 理想論

第52節 端緒

第53節 体象同体

ヘーゲル、天台家：「今その説によるに、相対と絶対との間に範囲の大小を分かつたず、同大不二と立つるなり。すなわち相対も絶対もその体同一にして、心も物も、象も体も、みな一境中にありて存するをいう」。

第54節 物心同体

第55節 理想物心同体

第56節 理想事物同体 釈迦、関尹子、『太極図説』、ヘーゲル

第11段 物心同体論第2 循化論

第57節 物心作用

第58節 理想規則

第59節 循化原理

[井上は、『哲学要領・後編』においては進化に対する退化を「溶化」と呼び、且つ両者を総合したものを「循化」と呼び、『破唯物論』においては進化と退化の総合を「大化」または「開発」と呼び、『哲学新案』においては進化と退化との総合を「大化」または「輪化」とよんでいる(船山信一『明治哲学史研究』p. 350)。

第60節 理想循化

第61節 帰結

第12段 結論

第62節 全論総括

第63節 同体論考証 古代の哲学は形而上に僻し、近世の哲学は形而下に僻するの傾向あり。東洋は溶化を主義とし、西洋は進化を主義とするの異同あり。インドは虚想に流れ、シナは実際に傾くの風あり。ドイツは演繹を本とし、イギリスは帰納を本とするの勢いあり。孔孟は人道、老荘は天理、イオニア学派は物理、イタリア学派は純理、経練学家は感覚、論理学家は思想をとりて、互いに他を排する等みなおのおのその一僻あり。

3-4. 『心理摘要』

『心理摘要』(明治20. 9・初版 選9)

本書の特徴は、「ハートリー学派の連合説と、スペンサー氏等の唱うる進化説とを参酌し、これを一科の理学としてその大要を摘示せるものなり」とある(p. 19)。本書は『通信教授 心理学』(明治21. 8・初版 選9)と構成・内容的には同じであり、叙述における原文は、選集版では省略されていて、近代西洋哲学者との依拠関係は直接知ることは出来ない。冒頭に付録されている西洋の「心理学系統史略」に略説されている円了の記述のみを挙げる。「稿録」は哲学史、倫理説のノートが主

であるから、所掲の哲学者の心理学説は僅かである。したがって、内容が一致しない場合が多いが、「稿録」所出の頁を参考のために挙げておいた。

しかし、円了は前述の通りペインの著書（The Moral Science）を精読していたから、当然、「稿録」以外の知識をペインから吸収していたに違いない。また井上哲次郎『倍因氏 心理新説』第4節「心理学（サイコロヂー）は哲学に最も親密なる関係を有し、全く相分つべからざるなり、実に心理学は哲学の根基なりと謂うべし、ハミルトン氏曰く、哲学は心意を以て其論ずる所の第1の題目とせらざるべからずと、デカルト、ロック、ベルクレイ、ヒューム諸氏の哲学も主として心理学に本づくなり、故に心理学は哲学の本源なりと謂うも不可なること無かるべし、」（第1篇5-6丁）という記述は円了に哲学研究に心理学の重要性を痛感させたことであろう。

心理学系統史略

古代ギリシャの学者中プラトン、アリストテレスの心理学は純正哲学。今日の心理学は純正哲学から独立して、「心性の現象作用を実究してその規則を考定する理学」となった。「心体の学ではなく心象の学」である。英国の哲学の特徴は心理学。ベーコンが哲学研究の方法を決め、ホブス、パークリー、ヒュームと続き心理を論究したが、独立の学科とならなかった。第1派はリードのスコットランド学派—先天説、第2派はハートリーの英国学派—後天説。英国学派学者の略伝：ホブス、ロック、パークリー（以上経験説；まだ心理学として独立していない）、ハートリー（連合説）、ダーヴィン、タッカー、ペーリ、ミル、ペイン、スペンサー（進化説）。その他スコットランド学派、ドイツの心理学者に言及。

p. 14：ホブズ (Hobbes)：1650年『人性論』

実験帰納の論理を人心の上に応用し、心理を論ずるに物理を用い、人の知識思想の作用は、分子の離合集散によりて物質の変化を現ずると同一理に帰し、諸感覚の離合によりて思想作用を発現するなりという。また、感覚を解するに分子運動の理をもってせり。【p. 265】

p. 15：ロック (Locke)：1687年『人智論』

人に本然の性情なきことを論定し、人智は経験によりて来生するゆえんを説明するにあり。これを説明するに感覚、反省の二種に分ち、感覚は身体外部の作用にして、反省はその内部の作用なり。なお外部の感覚、内部の感覚というごとし。この内外両作用によりて、我人が外界において経験するところのもの心内に積集し、かつ結合して思想となり知識となるという。故にその説全く経験説なり。【p. 264】

p. 15：バークリー (Berkeley)：1709年『視力論』、1710年『人智原論』

外界は識心の作用を離れて別に存せざるゆえんを証明し、唯心論の源を開く。

p. 15：ヒューム (Hume)：1739年『人性論』、1748年『人智論』

その論、虚無を唱え懐疑に陥る。その他二、三の心理説を唱えたるものあれども、これを略す。【p. 263】

p. 16：ハチソン (Hutcheson)：

特記なし

p. 16：リード (Reid)：

心理学に関する著述数部あり。故にスコットランド学派中、心理を論ずるもの氏をもって祖とせざるべからず。【p. 262】

p. 16：ステュアート (Stewart)

特記なし

p. 16：ブラウン (Brown)

特記なし

p. 16；ハミルトン (Hamilton)

氏の哲学はリード、ステュアート両氏を継述すといえども、独国カント氏の説に影響を受けしところ少なからず。氏はカント氏のごとく心性の現象を智情意の三種に分ち、智力は内覚外覚の二種に分ち、外覚によりて外界の事物を知り、内覚によりて内界の事情は心性の現象にとどまり、実体を知るにあらずという。【p. 225】

p. 16；フェリアー (Ferrier)

特記なし

p. 16；ハートリー (Hartley) 1749年『人類視察論』

スコットランド哲学者は多少心理学と純正哲学とを混同して論ずるをもつて、その心理学はいまだ全然独立の学科を成すに至らず。しかしてその学の全く独立せしは最近のことなりといえども、そのよりてきたるところを尋ぬるに、ハートリー氏の連合説より始まる。

氏の著書中一代の卓見と称すべきものは、脳髄振動説と観念連合説の二点なり。その説、ニュートン氏の理学上の新説を、心理上に応用したるものに外ならず。まず氏の振動説を考えるに、脳髄および諸神経は感覚を生ずべき機関にして、その分子の振動によりて感覚を生ずるものなり。故にもし外物ありて神経の末端に触るれば、神経分子の振動によりて精神作用を興起するに至るといふ。つぎに連合説を考ふるに、諸感覚観念互いに連合する性ありて、感覚は連合して思想となり、単純の思想は連合して複雑となるといふ。これ思想発達規則にして、今日の心理学の原理とすところのものなり。

The 'Observations on Man' (1749) is the first systematic effort to explain the phenomena of mind by the Law of Association. It contains also a philosophical hypothesis, that mental states are produced by the vibration of infinitesimal particles of the nerves. This analogy, borrowed from the undulations of the hypothetical substance

Eather, has been censured as crude, and has been entirely superseded. But, although an imperfect analogy, it nevertheless kept constantly before the mind of Hartley the double aspect of all mental phenomena, thus preventing erroneous explanations, and often suggesting correct ones. (Bain, A : Moral Science, p. 219)

このテキスト冒頭の文は抜粋されていないが、ハートリーの主著『人類視察論』(The 'Observations on Man')と脳髄振動説、観念連合説(the vibration of infinitesimal particles of the nerves、the Law of Association)について円了は知っていたと思われる。円了はその後の知見を加えている。ちなみに、円了は『倫理通論』第8編 各家異説 第2にハートリーを入れていない。【p. 262】

p. 17; プリーストリー (Priestley)

氏はハートリー氏のごとく振動説ならびに連合説を主唱すといえども、多少異なるところなきにあらず。およそ物質の形体は分子の集合離散の度に應じて現出し、精神作用は脳髄の機械的作用の上に生じ、脳髄を離れて別に心体あつにあらずという。しかして物質全体とその固有の勢力とを合したるものに至りては、その体無比最上の神体の上に成立せざるべからずと説ききたりて、唯物論と有神論とを接合せるもののごとし。

p. 17; エラスムス・ダーヴィン (Erasmus Darwin) 1731~1802

その心理学を説くや、ハートリーおよびプリーストリーと同説をとる。その説によるに、宇宙間に物心二元あり、心元は運動を生じ、物元はこれを伝うるものなり。物質の運動に三種あり、物理的、化学的、生活的、これなり。動植物の運動ならびに心性作用は、この第三種生活的運動に属すという。しかして心性作用の生ずるゆえんを説くに、感覚神経の運動をもってし、その運動の連続より思想を生ずとなす。

p. 17; タッカー (Tucker)

連合学派に属す。ハートリーの学派よりむしろリードの学派に近し。

p. 17；ペーリ (Paley)

ただ倫理上に一新説を立てたるのみ。【p. 261】

p. 18；ジェームス・ミル (James Mill) 1829年『心理書』(心象分析論)

実験心理学を唱え、観念連合説を取る。まず感覚と観念との関係を論じて、感覚去りたる後、心面にとどまるものを観念となし、その間に連合ありて、一者起れば他者これに従う。その前のものは感覚にあらざれば観念なり、その後なるものは観念に限る。しかしてその連合の強弱は、反覆、習慣等の事情異なるによる。かくして観念連合の道理は氏によりていよいよ明らかなり。【p. 260】

p. 18；ジョン・ステュアート・ミル (John Stuart Mill) 『ハミルトン哲学批評』

氏は純正哲学にてはホッブス、ヒューム、コント三氏の説を取り、心理学にては父の説とブラウン氏の説を取るもののごとし。【p. 260】

p. 18；ベイン (Bain) 1854年『感智論』、1865年『情意論』

氏の心理を論ずるは唯物論を唱うるにあらず、肉身を離れて別に精神の存する説を排斥するにあらずといえども、その説明に至りては、全く物理の規則により連合の道理をとるものなり。【p. 268】

p. 18；スペンサー (Spencer)

その第三部『心理論』につきて、氏の心理説をうかがい知ることを得るなり。その説、ハートリー、ベイン等を継ぎ連合の原理を用うといえども、一家の新説は進化の原理を心理学上に応用せるにあり。故に氏は、心性作用は生活作用より進化し、生活作用は内外応合より発達すという。かつその発達は一世一代の経験に限るにあらず、数世数代の経験により進化すという。【p. 259】

○本書は英国学派の実験心理説の摘要なれば、ここに独国心理学派の系統を述ぶる必要なしといえども、独国にも実験心理を講究する学派あれば、その人名を列挙するも、またあえて贅言にあらざるべし。

p. 19；ヘルバルト（Herbart）：実験心理学の祖。1776～1841。その学カントに基づくが、心理学を一独立の学科とする道を開いた。氏の心理学は実験、数理、および純正哲学の三元素により科学的に講究したもの。したがって、英国学派と比べると、純正哲学を心理学の基礎としている点が異なる。

p. 19；ベケネ（Bencke）：英国派の心理学の唱道者。1798～1854。ヘルバルトと異なる点は、純正哲学と数学とを心理学の基礎から排除したこと。

p. 19；ロツツェ（Lotze）：実験心理学者。1817～1881。その説は哲学上の憶説との混同が見られ、純正哲学の範囲を出ていないが、実験上の説明を用いている。したがって実験学派の一人に加える。

p. 19；フェヒナー（Fechner）：精神物理学の祖。1801～1887。

p. 19；ヘルムホルツ（Helmholtz）：1821～1894。生理学上より心理を論じた。しかし完全なる科学的組織を開いてはいない。

p. 20；ヴント（Wundt）：1832～1920。生理的心理学の完成者で、現在の独国実験心理学の泰斗。存命中なので、その学説は省略する。

3-5. 『妖怪玄談』（選集19 所収）

（第1集 狐狗狸の事 明治20年5月2日）（table-turning, table-talking）「こ

っくり様の話」(『哲学雑誌』1-1、1-2、1-4；明治20年2月5日、3月5日、5月5日 初出；『妖怪学』『哲学館講義録』(選集21 所収) 明治24年12月5日～明治25年10月25日)

コックリの伝来を論ず

第16節：西洋に從來、テーブル・ターニングと称するものあり。この語、テーブルの回転を義として、その法、コックリ様と毫も異なることなし。今、その使用法を述ぶるに、テーブルの周囲に数人集まり、おのおの手を出して軽くテーブルに触れ、暫時にしてその回転を見るに至るなり。また、テーブルに向って種々のことを問答することあり。これをテーブル・トーキングと称す。すなわち、テーブルの談話の義なり。その法、すでに回転したるテーブルに向かい、「神様は存在せるものなるやいなや、もし存在せるものならば回転を止めよ」といったるとき、テーブルこれに応じて回転をとどむることあり。

第17節：今、カーペンター氏の『心理書』中に挙ぐるところの一例を引きてこれを示すに、……。しかして、そのアメリカ人はこの法を呼んでテーブル・ターニングとかいいて伝えたるも、その土地の者、洋語に慣れざるをもって、コックリの語を代用するに至りしなりと思わるるなり、ゆえに余は、コックリはすなわちテーブル・ターニングと同一なりと信ず。

コックリの原因を論ず

第19節：今、余はこの原因を左の三種を定めて、いちいち説明せんと欲するなり。

第一は外界のみによりて起る原因、すなわちコックリの装置自体より生ずる原因

第二は内外両界の中間に起る原因、すなわち人の手とコックリの装置と相触れたるときの事情より生ずる原因《参照 第21節》

【p. 188 : Ms. 70b】 The hands slid over its surface when stop table.

「不覚運動の例」 《喜多川論文になし》

【p. 188 : Ms. 71b】 The movements which they involuntarily and unconsciously gave to the tables are the expressions of ideas with which their own minds are possessed, as to what the answers should be the questions propounded.

第三は内界のみによりて起る原因、すなわち人の精神作用より生ずる原因 (22節)

第21節：(第二の原因)

いかなるものも多少の時間、手を空中に浮かべて一物を支えんとするとき、必ず手に動揺を生ずるを見る。……これを要するに、第一に、人をして数分間その手を蓋の上に浮かべしむるときは、必ず疲労を感じて動揺するの事情あり。

【p. 188 : Ms. 69b】 第二因

In the case the movement is favoured by the state of muscular tension. Which ensues which the hand have been kept for sometime in a fixed position.

第22節：第三の原因は、コックリの説明を与うるに最も必要なる原因にして、これ全く心性作用よりきたるものなり。今、余は便宜のため、この原因を内因と外情とに分かちて説明せんと欲す。内因とは、人の心性自体の性質より生ずるものをいい、外情とは、その心性作用を促すところの種々の事情をいうなり。

第23節：内因は不覚筋動と予期意向の二種。この二種を理解するには不覚作用について述べる必要がある。不覚作用とは、人のその心に識覚することなくして、自然に発動する心性作用をいう。これを自動作用とも反射作用とも称す (例えば、消化作用、呼吸作用、刺激に対する眼、手足の

反応など)。これは延髄、脊髄より生じ大脳より生じるのではない。大脳の作用は有意識覚の作用であって、反射自動作用ではないが、大脳の作用中にも無意不覚の反射作用が見られる。

【p. 191 : Ms. 59b】 ○我人の努力の多くは自動作用より成る《喜多川論文になし》

Unconscious Cerebration, or Latent Mental modification. The cerebrum may elaborate intellectual results, attained by the intentional direction of our minds to the subject without any consciousness on our part. 是は恰も、手足を動かす事、続く中は unconsciously 動かす事と同一理にして習慣不
断より生ずるなり。

不覚の生ずることは may originate out of the following cause, [mental changes, of whose results we subsequently—喜多川論文になし] become conscious, may go on below the plane of consciousness, either during profound sleep, or while the attention is wholly engrossed by some entirely different train of thought.

即ち、○全部休止するときか（眠時）又は一方に全力を会注するとき
他の部分不覚を生ずるなり

第24節：大脳の「不覚」の起る一般的原因事情。以下の6種の事情より起る。

習慣・従来意力を用いてなしたることも、多年その一事をもって習慣となすときは、自らこれを識覚せずして自然に成るに至る。例—作詩、読書、読経など。

【p. 188 : Ms. 70b】 「不覚運動の例」 《書き込み・喜多川論文になし》

Muscular movements are continually being executed without conscious effort. As in the case of a man who continues to walk, to read aloud, or play

on a musical instrument, while his whole attention is given to some train of thought which deeply interests him. But the table turners would seldom listen to common sense so completely were they engrossed by their dominant idea.

意向・意力を一方に会注するときは、他方に不覚を生ずるの事情をいう。

疲労・心性の疲労したるときは、平常識覚せしことも識覚せざることある事情をいう。

眠息・人の眠息の間には、たとい夢中に工夫思慮することあるも、手足をうごかし寝言を発することあるも、自ら識覚せざる事情をいう。

え動・心性、思想の激動して感覚を失する事情。例—火事、酩酊のとき。

6. 錯雑・種々の思想の錯雑混同しておこるとき。例—心配ごと。

第28節、第32節：意向によりて不覚作用の起るゆえん。

第29節：不覚筋動とは、筋肉の間に動作を現じて自らその動作を識覚せざるを義として、これをコックリ作用の主原因とするなり。例えば、人すでにその心にコックリの回転すべきを知るをもって、その自ら思うところのもの、知らず識らず筋肉の上に発現してその動作を営むをいう。

[p. 190 : Ms. 62b] Ideas, which have passed out of the conscious memory, sometimes express themselves in involuntary muscular movement.

第35節：人の年齢をコックリに向って問うにその答えあるは、これを問う人あらかじめその年齢を知るをもって、不覚筋動を生ずるに至るなり。

【同前】 人の年を問へば答え (table turning) (書き込み)

第36節：一時記憶に失して識覚せざることの、不覚筋動となりて現ずる

ことあり。

【同前】 思い出さざる思想が運動となりて現ずることあり（書き込み）

第43節：外情。

第44節：結語；しかれども、これあえて鬼神の所為にあらず、狐狸の憑るにあらず、電気作用にあらず、有意作用にあらず、別に道理上証明すべき種々の事情ありて、無意自然に回転、上下するに至るなり。しかるに世人往々、コックリは妖怪の一種にして、道理をもって証明すべからざるものとなすがごときは、余があえてとらざるところなり。

4. 小 結

喜多川氏の労作と手稿コピーに拠って「稿録」を読んだのであるが、細部では未だ不明な点が残っている。再三指摘した通り、「稿録」は円了の研究ノートであってテキストからの英文抜粋、円了自身の日本語の書き込みなどは断片的であって、必ずしも一貫したものではない。しかし円了が目的を持って或る構想の下にノートを取っていたことは窺い知ることができる。例えば、明治15年に『開導新聞』に8回にわたり連載した「宗教編」は、明治15年7月から9月にかけて帰郷した時、郷里の人々の要望に応じて行なった10回の講義に基づくとはいえ、その構想は実に壮大なものである。これと同様に「稿録」の断片的な記録の背後には、ほぼ完成した構想があったと想像される。

明治16年前後における円了の問題意識は、多岐に亘るが、第1は真理を解明する手段としての西洋の哲学理論、第2は佛教復興のための倫理道德（排耶論とも関連するが触れない）、第3に人間性探求の方途としての心理学などであり、これらを実践的に総合したものが後に哲学館開設によって結実する人間教育であった。

いま「稿録」に沿っていえば、第1の問題意識は『哲学要領』、第2は「排孟論」、その展開としての『倫理通論』の著作へと向かい、第3

の人間心理の問題意識は、第2のそれと重なるが、『妖怪玄談』、『心理摘要』へと連なる。

(1) 『哲学要領』（「前編」）の執筆は「稿録」と一部平行しているが、円了は西洋古代哲学を A. Schwegler や F. Ueberweg の哲学史により、東西古代哲学を C.S. Henry の哲学史によって、その特徴を端的に把握していた。しかし円了の主たる関心は当時の学術思潮に沿った近代哲学、特に進化論であった。「稿録」巻頭部分後半の「a-z、以-利」の項目に付けられた墨書の「小見出し」の書き込みは、「後編」の執筆に際して、「稿録」を見直した時に付けられた可能性が大きい。

「稿録」最初の Spencer からの抜粋は象徴的である。Spencer の the Unknowable は、形而上学的思想傾向が強い円了の或る潜在的観念と直観的に連合したのではあるまいか。それは円了が「闇夜の烏」に譬えた「真如」である。円了は自然科学と精神科学の諸現象を「真如縁起」と捉え、絶えず変化し、進化する諸現象（無常なる諸法）の研究に際し、意識的ではないとしても、進化論を換骨脱胎したと思われる。円了の脳裏には常に東洋、特に仏教の観念が抜き難く存在していた。なお、円了の「真如観」から『哲学要領』に言及した論文に西義雄「学祖の建学精神たる真如観と妖怪学」がある（『井上円了の学理思想』東洋大学 1989 pp.5-44）。

(2) 「排孟論」は、直接的には、孟子の性善説に対する批判から出発し、その「良心」論を主に進化論などの立場から論難した学術論文である。円了は中国哲学史に見られる「性論」（心の本質を回る議論）の異説一性善説、性悪説、性善悪説一に着目して、その西洋哲学における対応概念として「良心」を回る議論を歴史的に精査している。そのために当時よく知られていた Alexander Bain のテキストを全面的に使用したのである。この論文では孟子の性善説そのものより性善を主張する孟子説の論理的矛盾を指摘することに力点が置かれ、その論証として近代西洋哲

学者などの説が用いられる。論文の内容はともかく、「稿録」の英文抜粋は際立って趣旨が一貫していて、精読の跡が見える。この研究によって円了は概説的ではあるが、広く倫理、心理に関する西洋の学説を身につけることができた。それが『倫理通論』にそのまま反映している。

(3) 心理研究に関して、「稿録」と『心理摘要』（選集本では原本の索引が省略されている）との対応を直接指摘することはできない。ただ冒頭の「心理学系統史略」に見られる通り、円了は「稿録」に出る西洋哲学者の心理学説を端的に捉え、その要点が述べている。これもテキストを精読した成果であろう。ちなみに「稿録」末尾部分の文献リスト中、Psychology の文献リストの大半は「稿録」に見られる名前または書名である。

『妖怪玄談』に見られるテーブル・ターニング現象は潜在意識研究の余論に過ぎない。円了の脳裏には迷信に対する客観的論理化の必要性が存在していたのである。「稿録」にはテキストは明記されていないが、Carpenter : Principle of Mental Psysiology が指摘されている。

(4) 円了は研究資料を整理することを大切にしており、「稿録」中の文献リスト、随処に記入されている書名のメモは円了が精読したテキストに出たものを整理した結果であろう。これが正しければ、細部を棄て大要を採る円了の性格からいって、「稿録」の抜粋は各著者の解説または引用の孫引きである可能性が大きい。したがって「稿録」の抜粋から漏れたテキストの文章がどのように「稿録」の書き込みや後の著書に生かされているかを検証しなければ、本稿の目的は達成したとはいえない。

[付録]

井上円了「明治十六年秋 稿録」所出の近代西洋哲学者

「稿録」		「排孟論」	「倫理通論」	「心理摘要」	「哲学要領 後編」
記載頁	人名	記載頁	記載章	記載頁	記載節
p. 271	Butler, Bishop Joseph	p. 264	124		
p. 270	Alden, Joseph				
p. 269	Abercrombie, John	p. 269			
p. 269	Winslow, Hubbart				
p. 268	Bain, Alexaner	p. 268続		p. 18	15, 36
p. 265	Hobbes, Thomas	p. 265続	120	p. 14	
p. 265	Cumberland, Richard		121		
p. 265	Cudwoth, Ralf		122		
p. 265	Clark, Samuel		122		
p. 264	Lock, John		123	p. 15	29, 30
p. 264	Hutcheson, Francis		125	p. 16	
p. 264	Mandeville, Bernard		126		
p. 263	Hume, David	p. 263続	127	p. 15	32
p. 263	Price, Richard	p. 263	128		
p. 263	Smith, Adam	p. 263	129		
p. 262	Hartley, David			p. 16	
p. 262	Reid, Thomas	p. 262	130	p. 16	
p. 262	Stewart, Dugald	p. 262		p. 16	15
p. 262	Brown, Thomas	p. 262			
p. 261	Paley, William			p. 17	
p. 261	Bentham, Jeremy		135		
p. 261	Mackintosh, Sir James	p. 261続	136		35
p. 260	Mill, James		140	p. 18	
p. 260	Mill, John Stuart			p. 18	36, 42
p. 260	Austin, John				
p. 260	Whewell, William	p. 260	139		39
p. 260	Ferrier, James Frederik	p. 260		p. 16	
p. 259	Mansel, Henry ongueville	p. 259			
p. 259	Bailey, Samuel		134		

「稿録」		「排孟論」	「倫理通論」	「心理摘要」	「哲学要領 後編」
記載頁	人名	記載頁	記載章	記載頁	記載節
p. 259	Spencer, Herbert		141	p. 18	10, 18, 24, 30, 36, 42, 45
p. 258	Kant, Immanuel		131		30, 36, 42, 45
p. 258	Cousin, Victor		137		
p. 258	Jouffroy, Theodor Simon				
p. 257	Voltaire				
p. 257	Murphy, Joseph John	p. 257続			15
p. 225	Hamilton, Sir William	p. 225続		p.16	
p. 225	Lewes, George Henry				
p. 224	Leckey, William Edward Hartpole				
p. 224	Bray, Charles	p. 224続			15, 21
p. 224	Huxley,				
p. 222	Romanes, Georg John				
p. 222	Peschel, Oscar				
p. 222	Lubbock, John				
p. 222	Hickok, Laurens Perseus				
p. 222	Ribot, Theodul Armod				15, 18, 30
p. 222	Darwin, Charles	p. 250			15
p. 221	Drapper, John William				
p. 220	Ueberweg, Freidrich				
p. 220	Galton, Francis				15, 30
p. 219	Maudsley, Henry	p. 219続			
p. 219	Flint, Robert				
p. 219	Sidgwick, Alfred				
p. 218	Everett, Charles Carroll				51
p. 218	Kirkman, Thomas Penyngton				41
p. 218	Bowen, Francis				
p. 218	Caird, Edward				
p. 218	Jevon, William Stanley				39
p. 218	Fiske, John	p. 218続			
p. 217	Ward, Lester Frank				
p. 217	Wright, Chauncey				

「稿録」		「排孟論」	「倫理通論」	「心理摘要」	「哲学要領 後編」
記載頁	人 名	記載頁	記載章	記載頁	記載節
p. 216	Laplace, Pierre Simon				
p. 216	Herschel, Sir Frederick William				
p. 214	Haeckel, Ernst				
p. 205	Carpenter, William Benjamin	p. 282続			36
	Fichte, Immanuel Hermann		132		51
	Shelling, F.W. Joseph		133		53
	Hegel, G.W. Friedrich		133		
	Comte, I.A. Marie Fransis		138		
	Berkely, George			p. 15	
	Priestley,			p. 17	
	Darwin, Erasmus			p. 17	
	Tucker,			p. 17	
	Herbart,			p. 19	
	Lotze,			p. 19	
	Fechner,			p. 19	
	Helmholtze,			p. 19	
	Wundt,			p. 20	